

『日本アジア研究』第9号(2012年3月)

裁判のおかげで失われていた記憶が蘇った ——あるハンセン病家族からの聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

ある〈ハンセン病家族〉のライフストーリー。奥晴海(おく・はるみ)さんは、1946年、福岡県生まれ。彼女の母親と母方の祖母がハンセン病だった。

晴海さんの母親は、1943年に鹿児島県にあるハンセン病療養所「星塚敬愛園」へ入所。婚約者であった父親の手引きで園を脱走、そののち晴海さんが生まれている。1950年、母親が熊本県にある「菊池恵楓園」へ再収容され、このとき、ハンセン病ではなかった父親も一緒に入所させられている。4歳の晴海さんは、恵楓園入所者の子どもたちが預けられる未感染児童保育所「龍田寮」に入れられた。1954年春、龍田寮の新1年生になる子どもたちが、寮内の分校ではなく、市内の小学校への通学を希望したのにたいして、近隣住民から反対され阻止される事件が起きる(黒髪校事件)。このとき晴海さんは小学校2年生だった。

まもなく、晴海さんは、父母の故郷である奄美大島へと帰されるが、そこでの生活は苦しいものとなった。この病気にたいする差別は奄美大島でも厳しく、母親の妹は、身内にハンセン病患者がいることを理由に離縁され、2人の子どもを抱えていた。その叔母のもとに、晴海さんは預けられたのである。貧しさの苦勞、親族からの辛い仕打ち、「ガシユンチューヌ、クワンキヤーヌ(患者の子どものくせに)」と蔑まれる扱いに、晴海さんは耐えなければならなかった。

晴海さんは、「らい予防法」違憲国賠訴訟の原告勝訴(2001年5月)につらなる流れのなかで、母親の遺族としての提訴をしている。その準備の過程で、母親の入所歴を調べたり、龍田寮時代の保母と再会したり、母親の療友たちと思い出話をしたり、自分以外の〈ハンセン病家族〉たちと出会ったりするなかで、幼少期の、奄美大島へ帰される以前のおぼろげとなった記憶を取り戻したという。本稿は、隔離政策によって奪われた肉親との関係や記憶を、晴海さんがふたたび取り戻していった物語である。

聞き取りは、2010年7月、奄美市(旧名瀬市)内の「名瀬港湾センター宿泊所」にておこなわれた。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、金沙織(キムサジク)。晴海さんは、聞き取り時点で63歳。また、2010年10月と2011年11月にも、奄美和光園内で補充聞き取りをおこなった。このときの語りは注に〈 〉で記す。

キーワード: らい予防法、ハンセン病患者の子ども、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学

** くるさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学

なお、本稿は、2010～2012年度科学研究費補助金基盤研究(B)「ハンセン病問題の《集合的な語り》の記録化の追求」(研究代表者=福岡安則)の研究成果の一部である。

聞き取りの前日、奄美大島空港から奄美和光園に向かう途中で、「田中一村記念美術館」を一緒に見学したこともあって、奥晴海さんは一村が描いた祖母の肖像画と父の肖像画を、聞き取り場面に持参してくださった。彼女の語りは、そこから始まる。なお、〔 〕内は、編者による補充。

田中一村と心かよわせた祖母

ばあちゃんの肖像画(しゃしん)をちょっと見せようね。〔画家の田中一村(たなか・いっそん)さんが、病気がでる前の]若いときのばあちゃんの写真から描(か)いてくれた。〔一村さんは]昭和33年に〔奄美に]来たちうから、〔これを描いてくれたのは、昭和]33年か4年ぐらいだろうね。来たすぐ当時ぐらいに。〔ここに署名が]あったんだけど、〔いずれお葬式のためにと]この額をつくるときに、園の〔入所者の]おっちゃんが切っちゃったんだって。〔父の絵のほうは]うちの母が〔昭和]35年に描かしたんだけど。これは入ってるのよ、〔「一村画 於奄美/昭和三十五年四月」って]本人の〔署名]がね。でも、これ、母が、〔和光園の]共同部屋で飾るわけにいかんで、押入の奥にしまってあったから、ほんとに保存が悪くて、ボロボロしとったけど。それ、わたしが見つけて。父の顔だからね、捨てるに捨てきれなくて……。これも写真から。一村さんがこれを描くころは、おカネを払とったらしい、みんな。園の入所者(ひと)が何名か描かしたらしい。ばあちゃんのためは、もう特別に、こんな色づきみたいなかんじで描いてるんだけど。こっちは遺影用にちって、ほんとにワイシャツだけ着てる父の写真(すがた)なんだけど、スーツ着せて描いてくれてある。このときはもう、おカネ儲けで描いとった時期。

うちのばあちゃんは遺影〔用)とかじゃなくて、もうほんとに、肖像画として描いてくれてるみたいだったけど、ばあちゃんは、もうそのときから「自分は死ぬときの写真はあつたよ」ちっばっかり、わたしらに言つて。〔だけど、ずっと]見せなかつた。あるとき急に〔病棟に]入院したとき、むかしの、〔柴又の]寅さんが持つて歩くようなトランクを持つとつて、「あれのなかから、風呂敷に包んであるの、取つておいでえ」ちつて。通帳と現金のおカネ、ほら、自分が亡くなつたときに、わたしたちが困らないようにと、包んでトランクに入れてあつたのよ。そのときにわたしたち〔一村さんの描いたばあちゃんの肖像画を]見とつたもんだから、ばあちゃんの写真はぜんぜん心配しなかつたの。「自分は姿がこんななつてるから、自分が死んだときは、これを使え」つていうことで、〔用意]してあつたもんだから。

それはもう、ばあちゃんと一村さんの付き合いのなかで描いてくれてるから。「イッソソ」と言いきらなかつたよ、名前をね。「イソソ、イソソ」ちつて。〔そのころ一村さんが]和光園へ来るときには、ステテコみたいな、夏のあんなのと、ランニング〔シャツ)で、そんなして来よつたから。ばあちゃんの部屋、4名共同部屋だったけど、ほかの与論〔島)から来ているばあちゃんとかが、「おばさん、そんな親切(こと)するな。どこの馬の骨かわからん」ちうこと言うたらしい。だけど、ばあちゃんはね、「どこのひとでも、ひとはいっしょよお」つて言つて。ほら、あのころ、食べ物なくて厳しい時代だから、自分が食べるなかからおにぎり、塩してやつたりとか、缶詰の配給があつたら分けてあげたり。そうしてしとつたときに、あるとき、ばあちゃんが縁側で座つたら描きだしたんだつて。「ああら、イッソソ、こんな自分を描いたらダメだ

から、この写真を持って行って、この写真で自分を描いてくれ」ちって、ばあちゃんが渡したんです。

〔一村さんは、昭和〕35年ぐらいまで、和光園の中、あの小笠原〔登〕先生がいらしたところにね¹、出入りされとったみたいで。そして、〔和光園の〕事務長の、髭の松原若安（じょあん）さんがね、すごくまた、カトリック系でやさしいひとで。〔名瀬市〕浦上の出身でね。若安さんが台湾から引き揚げて、わたしたちの田舎で教員されとったところに、奥さんをもらったのが、うちのばあちゃんの従姉妹なのよ。そういう関係で、若安先生がまた、和光園の立ち上げからの尽力（あれ）をされてるし、そして、こういうひとにはやさしかったもんだから〔一村さんも和光園に来やすかったんじゃないかと思う〕。

わたしは〔一村さんには〕会ってない。母たちはよく知ってるの。母とかばあちゃんが生きとったら、ほんとに、生き証人だけどね。だから、いま残念なのは、聞きたいことはたくさん聞いとけばよかったんだけど²。やっぱり、母親もわたしを産んだけど、育てきれない。わたしも、母でありながら母といつかんじじゃなくて、ただもう、わたしがいろんなこと言えば、母が悲しむと思うことで、ふだん、一線置いたような親子関係だったんじゃないかな。でも、苦しいければ、〔和光園の〕母のとこに行くしかないちう状態であったし。

裁判のおかげで記憶が蘇る

〔晴海というわたしの名前は〕わたしが福岡〔県〕で生まれたときに、父親が、奄美大島の晴れた日の海がいちばんきれい、ということで、付けたのよ。

〔生まれたのは、昭和〕21年。戸籍を見たら、福岡県〔鞍手郡〕宮田町になっている。直方（のおがた）付近じゃないかい。炭鉱がある付近だからね。

わたしは、〔奄美和光園で亡くなった〕母の遺族〔として〕の提訴のために、〔ハンセン病療養所への〕母の入所歴を取ったときに、自分自身〔の過去〕がはっきり〔蘇ってきた〕……。だって、父が早く亡くなってると、わたしは〔親戚に〕預かれて育てているし、自分の経歴はぜんぜんわからなかったんです。母が熊本の〔菊池〕恵楓園にいたことはわかっとったけれど、〔そもそも〕鹿児島〔の星塚敬愛園〕を脱走して、福岡〔の筑豊〕に行って、わたしが生まれてると、と。〔そして〕親子が別れたのが昭和25年の12月26日。そのとき、両親は恵楓園に、わたしは〔未感染児童保育所の〕龍田寮に、ちうことに、その日のうちに分けられたから。だから、親といたのもそれまで。〔そのとき〕4歳かな。

¹ 京都大学の皮膚科特別研究室主任として、ハンセン病患者にたいして「隔離」を強要する光田健輔らに異議を唱えた小笠原登助教授は、1948（昭和23）年に京大を退官したあと、1957（昭和32）年から1966（昭和41）年まで奄美和光園に勤務した。

² 2010年10月の補充聞き取りでも、晴海さんは、こう語った。（こんな裁判があつて、こういう〔わたし自身も自分の生きてきたところを語る機会があるという〕ことになると、おばあちゃんとか母とかの話を、いっぱい聞いとけばよかつたのにねえ、って思った。だって、おばあちゃんたち、そんなに惚けてもいないし、記憶を失わないで死んでるから。うちのばあちゃんなんか〔敬愛園の〕玉城しげばあちゃんなんかと一緒に、ほんとに、話し箱みたいで、もう記憶力〔抜群〕。外国から和光園（ここ）に来とった神父さんが教えた、英語の「ショッショッジョジョ」のたぬきの歌なんかもね、死ぬまで上手に歌いよつたよ、英語で。）

〔裁判が始まるまでは、自分の過去を〕知らない、知らない。夢に、うすらうすら……。それが確信つちなつたのは、裁判のおかげで取り戻せた。やっぱりね、続いての記憶はないけど、部分的な記憶はあるんですよ。わたしが龍田寮におつたときの、あの龍田寮の敷地とかね。そのそばにあつたのは、リデル、ライト先生たちの〔回春病院のあつた〕恵みの丘。ああいうところは夢にまで見よつたんです。そして、龍田寮の銀杏（いちょう）の木。そして、恵楓園の中の大きな溜め池。池じゃないけど、〔尿尿か〕なにかの処理場みたいに溜めてあつた。父が〔園内で〕農業しとつたあれで〔よく付いて行つたんだけど〕、柵もなにもなくて、ただただ、穴を大きく掘つて溜めてね。そつからズルズル落ちたらどうなるんだろうかあつち思うたら、怖かつたこととか。そして、恵楓園、けつきよく、大きくてね、東と西つち、あのとき分けてあつて、中心にいろんな施設（あれ）があつて。だけど、そこを通つたら〔職員に〕わかるつちうことで、檜〔の林〕づたいの後ろのほうを怖ーい思いで通りよつた。龍田寮か恵楓園かわからないけど、夜、やっぱり、飛行機が、ボンボン。ほら、終戦後だから、米軍のキャンプがたぶんあつたと思う。だって、かわいがられてるから、米軍さんに。わたしたちがクリスマスちうの知つたのも、米軍さんのおかげであつて。〔米軍さんが〕自分たちのとこに連れて行つて。基地内でクリスマスして、抱っこされて歩いた、そういう思い出がずうつとあつたの。その記憶の、部分、部分ね。そして、〔奄美の〕田舎に行つてから、いやあ、龍田寮におらしてくれたらよかつたのにいちう、そういう思い。〔龍田寮ということばは〕覚えてましたよ。「タッターリョウ、タッターリョウ」つて、わたしが言いよつたの、覚えてたよ。

父は、健常者だつたけど〔恵楓園に〕入つちうこと。父が早くに亡くなつた時点から、「母親が先になればいいのに、父ちゃんが先になつてえ」ちつて、ばあちゃんは残念がつつたのよ。父が元気だつたら、わたしに苦労なんかさせるひとじゃないしね。「あんたのためには父ちゃんが後になつたほうがよかつたのに」つちばっかり、うちのばあちゃんが言いよつた。聞き流しとつたのが、入所歴を取つたときに、はっきりいろんなことがわかつてきた。また、訪ねてみて、ああ、やっぱり、ほんとだつたんだあつて、自分が確信できたのも、この裁判のおかげ。あとあと〔恵楓園や龍田寮の跡を〕訪ねたときだつたんだけどね。記憶が取り戻せた。奄美に来てからの記憶は〔小学校〕2年生以降だからばつちりわかるんですけど、〔それまでは〕おぼろげな記憶。そして、龍田寮のなかにおつたら、あの保母さんたちは〔ひとが〕よかつたから、情操教育を受けて、楽しく生きられよつたんじゃないかなあつて、田舎に来ての、残念な思いでずうつと生きてきたこと。そういうことだけどね、〔わたしの人生の〕流れはね。

ばあちゃんもハンセン病だけど、〔それはわたしが昭和〕29年に奄美に来て、知つた。ばあちゃんはね、〔最初〕星塚に〔入つてる〕。入所歴で〔見ると〕、昭和14年の6月ぐらいだつたかな。叔父が10歳とか11歳、ちようど〔小学校〕5、6年生ぐらいだつたつていう話だけどね。ばあちゃんはね、そのまえに、田舎におるとき、少しずつ発病しだして。〔まだ〕奄美（ここ）に療養所がないために、鹿児島島の〔星塚敬愛園の〕ほうに。隠れておくわけにいかないし、たぶん、もう、ここにいられなくなつて、行つたんじゃないかなあ。

じいさんとのあいだに3人子どももおつたけど。祖父がほら、名瀬に出てき

て、いろんな商売。親方になって紬商売もしたし、鯉節商売とかいろいろしたらしくて、いろいろ歩いとったあいだに女性つくって。して、おばあちゃんと離婚。〔祖父は〕羽振りがよかったんだね。だから、田舎のほうに立派な家もつくってあったし。うちの母が長女だったので、下には叔母と叔父を面倒みながら、そうしていくうちに、また母が病気〔になって〕。祖父がイライラして、長女の母に当たってね、〔物を〕投げたところから、その、投げられた痕付近から斑紋が出てきたって、母はよく言いよったんだけど。顔付近に斑紋ができて、そして、急に神経痛がきてね。指がこういうふうに2本、曲がったらしい。そして、〔昭和〕18年に、〔ばあちゃんが〕いるということで、星塚〔敬愛園〕のほうに母は入所している。

〔もともと、うちは〕大和村（やまとそん）の田舎に住んどったんですよ。ここは〔名瀬市、いまは〕奄美市でしょう。奄美市が切れたあっちがわが大和村になるんです。病気になるまで、その集落に住んでて。〔田舎では、この病気のひとに対して〕表もってはやわらないけども、ことばの端々（はしはし）に。ほら、〔ハンセン病は〕いろんな障碍が出てきますよね。やっぱり、弱い立場にはなりますね。陰で言うときには、「クンキアモレ」ちって。乞食つちうことを、島のことばで「クンキアモレ」ちち言う。〔あるいは、和光園のあるところが有屋（ありや）というところなので〕「有屋行き」ちち〔言って〕。もう、手でね、〔こっちへ〕来るなって、こうするんですよ。〔わたしなんか〕そのことばでね、もう、えんえんと聞かされてきているし³。身内のなかでも、やっぱり、〔差し障りが〕ありますよ。戸籍調べるとおばあちゃんたちとかが和光園におる〔ことがわかる〕ために、おばあちゃんの兄弟の子どもの子どもだけけど、結婚していたのに、そういう因果関係で〔問題に〕なったとかちって、身内どうしから言われるときもあるし。やっぱり、厳しかったんですよ⁴。

母と祖母の星塚敬愛園からの逃走

父の〔生まれた〕集落は、〔おなじ〕大和村の隣集落なのよ。そこで、おばあちゃんが、父〔方〕のおばあちゃんと、海でね、ほら、元気なときに潮干狩

³ 2010年10月の補足の語り。〈むかしは、精神患者とかハンセンのひとたちを、山小屋に入れたちう話がありはするのよ。〔うちの母の田舎の〕戸円（とえん）なんか波が強いとこだから、浜辺には置けない。山だろかね。小屋つくって。〔戦後〕日本に復帰してからは、みんな〔療養所に〕隔離されたね。〉

⁴ 2011年11月の原稿確認のときの追加の語り。〈「おばあちゃんの兄の子どもの子ども」だから、わたしには二（ふた）いとこになるけど、親族にハンセン病がおるちうことを言われたって。そこまで、鹿児島付近のひとは調べるのか、と。鹿児島は奄美のひとたちを、「島ンチュ」ちうあれで扱った時代があるから、やっぱり、そういう偏見（あれ）があったんだろかね。そのときに、松原若安（じょあん）先生の奥さんが、うちのばあちゃんと従姉妹だからね。先生が、きっちり、「ハンセン病はこういう病気で、こういうことです」ちう説明したら、納得したち。そういう問題が起こるのを、わたしたちの責任みたいに言われても、それはもう困るちうことであってね。そんな結婚だったら、最初からしないほうがいいんじゃないかあち。最初で言って壊れるものは壊していいと、わたしたち自身が思ってる。だって、ひとつウソ言ったら、一生ウソつかなくっちゃならない。これ、まだ、昭和40年、50年代で、新しいことだけどもね、やっぱり、鹿児島付近のひとは、そういう〔身元〕調査をしたんだなあということ。〉

りしてね、磯場（いそば）で知り合いになって、友達だったらしい。そのときに、「自分のところにこんな息子がいる」「自分のところには娘がいるから」ちうことで、父と母は結婚の約束ばされとったみたい。

そうしたときに、母が病気になって、〔鹿児島県の星塚敬愛園へ〕行ったけど、父もね、そんなにハンセン〔病〕のことを詳しく知らないで、すぐ簡単に治るぐらいの病気（あれ）だと思って。父もまた鹿児島県に出て、仕事をしながら、星塚に〔会いに〕行ったりとか、見守ってはいたらしい。で、〔結婚を〕約束してる責任上かなにかわからないけど〔母を敬愛園から連れ出したの〕……。

ほら、戦争が厳しくなりだして、鹿屋には〔日本軍の〕基地があるために、すごくあのへんは混雑しいだしたもんだから、それにかからげて、ばあちゃん〔と母〕を連れ出したらしい。で、うちの叔母が鹿児島県の軍事工場（こうば）で働いてって、もう爆弾でやられるたんに、鹿児島も危険ということで、福岡のほうにばあちゃんの妹夫婦がいたから、そこを頼って、みんなで福岡に行ったらしい。

〔当時は〕もうね、どうでもなれ、みたいなかんじで、〔園の〕管理自体がおろそかだったらしい。おばあちゃんたちも、そのころまだ元気だし。鹿児島で叔母が働いてるときは、〔市内の〕新屋敷でね、叔母にご飯つくってあげたりとかしながら、また星塚に行ったり。叔母もまた、あそこ、ばあちゃんに会いに行くために、船で古江に渡って、それから電車に乗って、永野田の駅を降りて、敬愛園（あっち）まで歩くときの「きつかったこと、きつかったこと」って、叔母が話しよったよ。そんなことしながら、終戦むかえて。ばあちゃんが〔奄美に〕終戦前に帰ったのか、後（ご）に帰ったのか、それ、ちょっとわからないんですよ。〔戦後は、勝手には〕帰られないのよ。渡航手続きがいるし。こっち、ほら、やっぱり、〔米軍政府統治下の〕外国になってるから。〔いづれにしても、昭和〕22年に、奄美和光園にばあちゃんが入ってる⁵。

⁵ 祖母と母の敬愛園からの脱走の時期、そして、祖母の奄美への帰郷の時期については、晴海さんがまだ生まれる前のことであり、情報が不確かなようだ。2010年10月の補充の聞き取りでは、晴海さんはこう語った。語り本体と重複するところもあるが、記載しておこう。

〔敬愛園からの脱走の時期？〕叔母がね、鹿児島県の軍事工場で働いてて。とにかく、鹿児島県の新屋敷付近に叔母がいて、ばあちゃんはそこに……。ばあちゃんも〔敬愛園からときどき〕出とったりしたのかね、まだ元気なころだからね。で、叔母もまた、ばあちゃんが敬愛園（むこう）におったときには、いまの垂水ではなくて、古江まで船で行って、それから、電車かなにかで永野田駅〔まで行って〕。「あそこから敬愛園まで歩いたときの、遠いかったこと」って言うんだけど。そういう行き来はしとったみたいで、ばあちゃんも新屋敷のこと詳しいし。でも、鹿児島が、爆弾でやられてばっかりしてるから、もう危ないってことで、〔みんな一緒に〕福岡のほうに行ったんじゃないかあとは思うけどね。ばあちゃんも福岡に行ってるよ。これは、わたし、ばあちゃんから聞いた話だから。だから、ばあちゃんが、ほら、うちの父が亡くなったとき、自分の娘の、「〔体の〕弱いスミエが先になればよかったのに」ちったのは、父がね、ザルつくったり、畳刺したり、手に技術（あれ）があるもんだから、農家のひとのいろいろな仕事を加勢してね、物々交換して、生活に困らなかつたちうわけ。〔父には〕そんな器用さがあつたから。だから、「〔ハルミの〕お父さんが後だつたほうが、あんたのためによかつたあ」ち、ばあちゃんがいつも悔やみおつたのは、そこだつたの。

祖母と母をよく知っている敬愛園のおばあちゃんたち

〔和光園に再入所した〕そのあとでも、おばあちゃんたち、〔星塚敬愛園に〕友達もいたから、ほら、〔敬愛園と和光園と〕おたがいに療養所どうしだから、付き合いはやっとったと思うんですよ。母の従兄弟も星塚におったもんだからね、ハンセンでね。おばあちゃんの姉さんの子どもがいたんですよ。もう亡くなってるんだけど。裁判の終わったころまでは元気でいたから、わたしも何回か会ってるんですけど。で、熊本〔の恵楓園〕にも友達いっぱいいたし。そういう付き合いはずっとあったんです。

おばあちゃんたちが入ったころのことをよく知ったのが、〔敬愛園の〕玉城しげさんとか上野正子さん。裁判が終わって一周年の忘年会があるちうことで、〔わたしとおなじく、ハンセン病家族である〕宮里〔良子〕さんがね、「忘年会に来ない？」ちうから、〔やはり、ハンセン病家族で、熊本在住の〕K子さんは国宗先生が〔車に〕乗せて、わたしはこっから行って、忘年会したんです。「奄美大島から、わたし、来た」ちったらもう、〔敬愛園の〕おばあちゃん連中がね、わたしを摺んで、「だれのあれ？ だれのあれ？」って言いだして。「いやあ、うちの母とかばあちゃんも、ここにいたらしいんですけどお」って言ったらね、「だれだれだれえ？ まあ、あんた、クルさんのお孫さんねえ。したら、お母さんはスミエさんねえ」ちって。「はい」ちって言ったら、「自分たち、入ったところが一緒。もう、すごく楽しくて、よかったよお」ちって聞かしてくれて。いまでも〔顔を〕見たら、しげばあちゃんが、すぐその話をする。「ばあちゃんと部屋が一緒だった」ちって。〔奄美大島の〕古仁屋（こにや）〔出身〕のおばあちゃんは、母と〔部屋が〕一緒だったちって。で、上野正さんはまた、〔母と〕同年輩になるから、「とってもいいひとだったよお。あなたのお母さんは」ちうから、「そうですか。そう言ってもらえれば、うれしいですう」ちち、わたしは言ったんだけど。そういう話も聞けて、よかった。

筑豊での父母との子ども時代

〔父母の逃避行の結果、筑豊で昭和〕21年にわたしが生まれて。生活はきついながらも楽しかったらしいですよ。〔どんなところに住んでいたかは〕ちょっとわからないけど、隣におにいちゃんたちとかお友達がいっぱいいたらしいのはわかる。やっぱ、母は〔体が〕弱かったんだらうなあと、わたしがいま思うのは、わたし、外に出るときは、いつも父と出とったような〔記憶が〕おぼろげにあるんですよ。父がちゃんと自転車の前にね、自分が座るサドル（とこ）とハンドルのあいだに座布団を2つ折りにして。〔わたしを〕そこに座ら

それから、ばあちゃんと叔母とは島に帰ってるのよね。そして、ばあちゃんは〔昭和〕22年に奄美和光園に、また入ってるの。だから、福岡にもいつときはおったけれど、やっぱりもう〔福岡も〕危ないちうことで、また島に帰ったと思うんだけど。〔でも〕帰ったときに奄美和光園に入ってるから、〔帰ったのは〕終戦後かな。密入船で帰ったのかね。そこらへんが、ちょっと〔確かなことはわからない〕。〔弁護士の〕国宗〔直子〕先生も、ほら、遺族の提訴のときに、母は4、5年〔入所期間が〕切れるけど、ばあちゃんも2年ぐらいの期間切れてるから、そのころ、奄美のひとで沖縄愛楽園に行っとったひともいっぱいいるもんだから、「晴海さん。ばあちゃん、愛楽園に行ってなかった？」ちったけど、ばあちゃんは愛楽園へ行ってないと思う。）

せて、父がいつも乗せて歩いて、買い物も行って。父はまた、すこしお酒飲んで酔っぱらったりしても、わたしをそこに乗せて、自転車を引いて帰ってきて。

母親は名前を「スミエ」ちったけど、父が「スミ、スミ」っち呼ぶからね。だからわたしが「スミィ、いま、帰ったよお」ちって言うちってね、母がときどき言いよったのが、「コラッ、子どもの前ではちゃんと呼ばないと。とうちゃんがそういう呼び方するから、子どもまで、スミちって呼ぶ」ちって言えば、父ちゃんが「かあちゃんっち、ちゃんと言わんといかんよ」ち言えば、「うん」ちちゃ言うんだけど、「スミィ」ちってまたあれするって言ってね。

そして、父が仕事に行ってるあいだに、もういたずらばっかり、わたしがするちってね。お父さんがしてる日曜大工の真似。〔父は〕手が器用でね、ザルつくったりとか、いろいろしよってあるもんだから、けっこう、ほら、農家のひととの物々交換でね、生活もよかったらしい。そして、「畳も、いろんな刺すね、道具（あれ）もあって、そういうことなんかしよったからね、生活、ちゃんとさせてくれよった」ちってね、ばあちゃんは、それもひとつの気に入りで言いよったんだけど。それを見様見真似で、わたしが、父ちゃんがおらんあいだに、畳にいっぱい釘は打つし、してたら、怒られてね。したら、〔母が〕「コラッ」つって、ペンしようとする前に、わたし、「手の曲がっるとるものが、自分を打つな」ちち言いよったらしい。やっぱ、2、3歳ごろ。「ほんとに、ユムグチばっかりしてえ」ちって怒りよった。おしゃべりばっかりするちうことを、「ユムグチ」ちって言うの、島のことばで。いらんこと言うから、わたしが。「手の曲がってるのが打つな」ちって。だから、写真見ても、母がわたしと写ってる写真がない。

わたしが〔小学校の〕入学前に、親としては黒髪〔小学〕校に行けると思って、当時のセーラー服を買って着せて。その写真が、田舎の習慣でね、3人写したら、あんまりよくないちうことが言われるもんだから、恵楓園におった〔奄美の〕大熊〔出身〕のおじさんが入って、4人で撮ってる写真が、たったの1枚の家族写真。それ以後は、母は写真撮るのも嫌がって。だけど、2年生のとき、わたしが〔奄美に〕帰るときに、1枚だけ。納骨堂からこっちの古びた教会みたいところが、〔恵楓園に〕いまもあると思うんだけど、その横でね、わたしと写真撮ろうとするけど、わたしが、こっち側にずうっと逃げる、逃げる。母が寄っていけば、逃げる。もう、ここで行き詰まりで、こうしてわたしが〔嫌々〕撮ってる写真が1枚だけあるんだけど。そのときも〔わたし、病気の母親を〕すごく嫌がったちう。だって、龍田寮〔の〕黒髪〔校〕事件が起こって。ほら、怖さを知って、親たちの病気を知って。もう、親たちに文句ばっかり言いよってね。そして、恵楓園のなかの両親のお友達、〔わたしを〕かわいがってくれてるおじさんたちにむかってね、「おじちゃんのおくち、どうして、こうなってるの？」ちったり、「おじちゃんのおてて、どうして、なくなってるの？」って。みんなをキョロキョロ見とって、文句ばっかり言いよって。だから、早く奄美に連れていこうちうことで、連れて行ったらしい。夏休みの1月（ひとつき）〔恵楓園に〕置いとくつもりだったけど、もう、ここに置いといたらね……。だって、「怖い病気」ちうことを植えつけられたのは、その黒髪〔校〕事件で、社会がワアワアワアワ、龍田寮にむかってするもんだ

から⁶、やっぱり、自分たちの親のせいだなあ、ということが、うすうす感じられたのかもしれない。

生まれて半年で死んだ弟

あのね、[ちょっと話かもどるけど、筑豊で] 弟が生まれて。「[わたしが] おねえちゃんよ」ちって、かわいがとった、うっすら記憶(あれ)はあるけど、そんなにきちんとわからないのよね。[生まれて] 半年ぐらいいいた。わたしは、生まれて1年で写真館で撮ってる写真があるんだけど、この子は、おすわりをあんまりしきれないときに、わたしに寄り添わせて撮った写真1枚[ある]だけ。生まれた年の8月ごろに亡くなってる。そのショックで、母がまた病気も騒いだと思う。

[死因は] 腹痛(ふくつう)。ビワとなにかをもらったらしい。わたしのせいかもしれないっ、母が怒ったこともあるけど。あのね、弟に食べらすのをわたしが欲しがった。弟はわたしが食べてるのを欲しがったみたい。それで、親が見ないまに交換して。そのあとに、下痢、腹痛をおこしたらしい、って。

母は強制収容で菊池恵楓園へ／ハブに噛まれた痕のある父も収容されて

⁶ 2003年10月15日付け『熊本日日新聞』、「ハンセン病史 特集『人間回復』の道求めて」のなかで、奥晴海さんが取り上げられていて、「寮の子供らが小学校への通学を拒否された『黒髪校事件』は、小学2年のとき。大人たちの反対運動に影響され、近所の子供から『うつる、近寄るな』と石を投げつけられたこともあった」とある。

2010年10月の補充聞き取りでは、晴海さんはこう語った。〈あのね、いまは、龍田寮[のあったところ]の下は住宅地になってるけど、むかしは田園地帯で、農家がポツンポツンとあって、咲きよったれんげ草が頭に残りよったくらい、風景がきれいかったんですけど。わたしたちも、そこの下に下りて行って、友達と遊びよったけれど、この事件のおかげで……。わたしたちもなにか言われてるちう記憶はあったけど、あとで保母さんたちから聞いたらね、あそこ[反対派の住民が] 単車とかあんなのに乗ってきて、マイクを持って龍田寮にむかって攻撃をした。その印象がわたしにもあったもんだから、それを[保母の] 森さんたちに聞いたら、「子どもたちが、怖い、怖いって。みんなを集めて、抱きしめて過ぎした」っちおっしやった。わたしたちは、なにか言われてるなってことは、だいたい、言葉がほら、もう2年生ぐらいになってきたら、ちょっとずつわかってきて。したら、下で遊びよった子どもたちが、やっぱり、ほら、親たちがそういうふうになっていったら、わたしたちのほうに、そういう攻撃がポンポンあって。あそこから、あんまり下に下りて行って遊ぶちうことはなかったと思います。[石を投げられたことも] あるよ。だって、[あそこ] 石ころばかりだもん。あそこの子なんかついたら、悪戯坊(いたずらぼう)だからね。

わたしね、父がわたしを奄美(ここ)に連れてきて、[それ以降] 父とも会ってない。母はまったく、龍田寮のこと知らないんですよ、やっぱり病気の関係で[恵楓園から外に] 出たことがないし。父は健常者だから、龍田寮に何回か来ていて、龍田寮のことを知ってるし、[保母のリーダーの] 渋谷おかあさんのことを父はいちばん知ったと思う。わたしも、ほら、その渋谷おかあさんと、わたしの担当だった中尾保母さんの2人だけは、いつまでも覚えとった。その話を、ぜんぜん親としないのに、わたしがなぜこれだけ記憶があるかなあと思って、たどったら、やっぱり……。だから、子どもの記憶というの、こわいところがあるねと。わたし、はあ、これ、やっぱり、夢じゃなかったんだって、確実に摺んだとこが何点かありますよ。大きくなって、50年ぶりで[現地を] 見て。〉

〔昭和 25 年に母が菊池恵楓園に再収容されるんです。〕ほら、〔戦後の「無癩県運動」というか〕強制収容が始まってるし。もう〔外の社会に〕おるにおれなくなったんじゃないかね。母が収容されていくとき、父は〔母を恵楓園に〕置きに行っただけで、父はわたしと外で暮らすつもりだったと思うんですよ。元気だから。仕事もしとったし。だけど、例のごとく、家族検査になって。父は、ハブにね、足首の付近をやられて〔いて〕ね。2度やられたらしい、奄美（いなか）で。あのころは、お医者さんもないし、自分たちで切って血を出して。そういう治療してるもんだから、足を引きずりよったのよ。ハンセンのひとは、バツみたいなのに、こうするけれど、父はそうじゃなくて、ちょっと〔引きずるように〕しとったの。そうしとったところ、けっきょく、どういう診察になったかわからないけど、夫婦団体ちうことで、〔父も恵楓園に〕入れられて⁷。わたしも検査されるんだけど、わたしは〔未感染児童保育所の〕龍田寮に、ちって。もうその時点で引き離されて。

〔わたしの足にも〕火傷〔の痕があったんだけど〕、あれは、両親がはっきり覚えてて。2歳のころ、七輪で〔沸かしてた〕お湯かなにかをひっくり返して、わたしが火傷して。したら、うちの父がね、田舎療法で。あのころ、田舎のひとはね、火傷にシオンベンを掛けたら治るちうからね、父ちゃんがシオンベンをして掛けたらしい。それをまた、わたしが「うちが火傷したら、とうちゃんがシオンベン掛けた」っち言いふらして。その記憶（あれ）があるから、いくら先生が突いても、両親がこれは火傷ちうことを知ってるために、そこは撥ねたと思うの。でも、わたしも、なんで、ここばかり突くのかなとは、あとでね、不思議になったけど。

だから、1回ぐらいで、なんでこんなに、このことが記憶に残るかな、と思ったけど、毎月やるとれば、それは記憶にも残るでしょう。〔龍田寮へ行ってからも〕毎月、身体検査はあったらしい。宮崎松記（みやざき・まつき）園長が、よおく、龍田寮（そこ）に来ては……。わたしが「痛あーい」ちって。いろいろな検査してるんだけど、知らんふりしてそこを突くのよね。「痛い！」っち、わたしが怒って。わたしが黙っとった子だったら、もう、そのまま〔即、収容〕だったんじゃないかなあって、いまは〔思う〕。でも、両親が〔わたしを恵楓園に入れることを拒んで、親子が〕離れ離れになっても、やっぱり、この道を選んだちうことは、この病気〔だとレッテルを貼られること〕の怖さを知っとったんじゃないかなと思う。

わたしに刻印を押させまいとした父母に感謝している

わたし、熊本の〔退所者の〕SKさんにね、2、3年前、恵楓園で、わたしたち「れんげ草の会」の〔集まりの〕後に懇談（あれ）したとき、ちょこっとし

⁷ 2010年10月の補足の語り。〈うちの父ちゃんとかね、熊本〔の恵楓園〕にいるハツヨおばさんなんかはね、もう夫婦団体として、あのとき、宮崎園長が入れてる。そのおばちゃんも、1歳未満の子どもを連れて、夫（おじちゃん）を熊本〔の恵楓園〕に入れたときに、夫婦団体として入れられたちうから。〔和光園だって〕あのFくんたちだって、軽い湿疹が出て、検査（あれ）して、大西〔基四夫〕園長が入れてるけど。小笠原〔登〕先生が「この子たち、〔ハンセンの〕病気じゃないから、出しなさい」って言ったみたい。Fくんは、奄美（ここ）で退所者の会長もしとったけども、〔いまは〕神戸〔のほう〕にいる。〉

たいろんな話のなかからね、「いやあ、[閉鎖された] 龍田寮から行く場所がなくて、何人か〔恵楓園に〕入ってる子たちがおったよ。ハルミちゃんたちも、そんなにして〔恵楓園に〕おったほうが楽だったねえ」ちって言われたの。だけど、「それは違う」って、わたし言ったの。「それをね、おたくなんかに言われるたびに、父は偉いって、わたしは父を尊敬するよ。あの当時のハンセン病の怖さをね、知っとったのは、両親と思う」っち。「自分たちは仕方ないけど、この子にまではそんな思いをさせたくない」って思ってね、あの厳しい奄美大島に、わたしを押しやってくれた父と母を、わたしは恨みもしたけれど、わたしは、自分がいま強く生きれるのも、そこがあったからと思うから。「これはいっかい刻印を押されたらね、それで生きなければならぬし、そこをしなかった両親に感謝するよお」って。やっぱり、いろんな面で大変なこと社会であったけど、そこを乗り越えられたからね。わたし、いま、こうして生きれるし。また、ほんとに、こういうことを一生語るつもりもなく、自分の胸でいろんなことを思いながら、この世は去るつもりだったけど、なにしろこの裁判のおかげでね、こういう話せる機会がもてたということも、まあよかったのかなあと。裁判が起こったときは嫌な気持ちになった〔けど〕、はっきりいって。

思い出の龍田寮

龍田寮での生活は、島に帰ってからの生活が辛かったから、いいことばかりしか覚えてない。わたし、奄美に来てね、いろんな童謡——田舎の子、知らないのに、ええっ、わたし、こんないっぱい歌を知ってるんだあ、とか、自分で思いよった。そして、「春の小川」の歌を、こんどまた、小学校で覚えやっしたときに、「岸のすみれやれんげの花に……」。野のすみれはたくさんあるのに、あれ、奄美大島にはれんげの花はひとつもないねえ、って。龍田寮から見たれんげ草畑を、ずうっとわたしは夢にまで見よった。〔大島には〕れんげはないのに、なぜ、れんげ草畑〔を夢に見るの〕だろうかあって、それをずうっと思いながら、育ってきてる⁸。なにしろ、龍田寮ではよかったと思う。いろんなところにも連れて行ってもらったし。水前寺公園とかね、保母さんたちと行ったり。また、〔当時の子どもは〕クリスマスなど知らないのに、わたしはあの時点で知ったちうことは、米軍さんたちが基地に連れて行って、それこそ、もりもり、いろんなのをね、プレゼントもらって、その米軍さんに抱っこされて、そのなかを歩いた思い出とか、あれえと思いながら育ってきてるんだけど。

〔龍田寮の〕保母さんたちはやさしかったですよ。〔裁判のあと、保母さんたちに会いました。お会いした〕森〔三代子〕さんとかあのひとたちは、いちばん後に入ってきた保母さん。わたしたちが出る前、龍田寮がなくなる前にね。だけど、わたしはね、あの保母さんたちに会ったときに、「シブヤトシコさん、

⁸ 2010年10月の補充聞き取りでの語り。〈〔大島には〕スマレはね、野のスマレとかあるんだけど、れんげ草は、ほんとにないしね。でも、なぜ、わたしがれんげを知ってるんだろうかあ。なんで、れんげ草畑のことばかり思うんだろうかあ、ずうっと思って。ほんとのれんげ草を見たのも、〔裁判で〕熊本に行きだして……。熊本じゃないわ、あれ。熊本に行った帰りに指宿（いぶすき）に行ったとき、田んぼにね、ちょうど3月の末だったから、見たときに、ああ、やっぱり、これだあと思ってあれしたんですけど。〉

ちって、いましたよね？」なぜか、わたしの頭に渋谷おかあさんのことだけは覚えてた。「渋谷おかあさんを覚えてるのお？ あなたは、渋谷のおかあさんのお気に入りだったからねえ」ちって、森さんと木村〔チズエ〕さんがおっしゃるんだけど、そうかもしれない。熊本で裁判のあとに3年ぐらいして〔森さんたちに〕会ったときにね、渋谷おかあさん、あのころまで東京に元気でいらしたみたい。「50何年ぶりにハルミちゃんと会えたよお」って、森さんが電話したら、「ああー、ハルミは元気だったかあ」って、おかあさんも、90何歳になられとって、言われたらしい。その後の連絡が取れないから、たぶん亡くなったんじゃないかなとおっしゃるんだけど。「いやあ、もうすこし早かったらね、いろいろなひとと会えよったのにねえ」ちったら、「いや、自分たちもそう思うよお。あなたたちを龍田寮から出したあとにね……」後追いするなちう指示（あれ）が下ったらしい。「子どもたちのあとを追うな」と。やっぱり、みんなが頼るからじゃないかな。

渋谷おかあさんのこと、ずっとわたしの頭にあって。おかあさんの言いつけでね、龍田寮からまっすぐ歩いたら、リデル、ライト先生のとこの、あれ、いま〔リデル・ライト〕記念館〕になってるけど、あれがまだ記念館にならないちで使ったときに、新聞を持って行ったりとか、ちょこちょこ走ってあれした。けっこう、あのときは遠いような感じだったけど、あら、こんなに近かったかな。そして、そのいまの記念館のとこなんか、階段をポンポンポンと上がっていく、そういう記憶とかね。そして、あの「恵みの丘」、けっこう、わたし、高い山に登ったような感じだったのよ。あれえ、この程度だったのかな、と。そして、あのまわりの石の上でね、ままごととして遊んだこと、そういうことはずっと覚えてましたよ。ああ、やっぱり、ほんとうだったんだって、自分自身で確かめられて。

子どもどうしもね、けっこう年齢の幅があるから、そんなに喧嘩（あれ）はなかったですよ。〔仲〕よかったですよ。〔上は〕中学生もいる。あとで聞いた話だけど、中学生はまともに〔市の〕学校に行かれたらしい。だけど、わたしたちは分校でね。宮崎先生っていう男の先生だったけど、その先生が分校で勉強を教えとったの。まとも〔な授業〕だったかなと思いはするけどね。小学生みんな〔全学年一緒の授業〕だからね。

でも、保母さんたちが言うにはね、「ハルミちゃんたちみたいに、こうして会えた子もいるけど、田舎の身内に引き取られて、自殺した子もいると聞いたら、ほんとに悲しいよお」って。だからね、けっきょく、龍田寮を出てね、施設に行った子がよかったのか、身内に〔引き取られて〕行った子がよかったのか、それはわからないけど、けっこう、身内に行った子は、肉親のなかでのいじめに苦しんだんじゃないかと、わたしは思うけどね。自分自身がそうだから。

高松宮に花束贈呈の役をしたことも

〔むかしの映画「あつい壁」は〕見た〔けど〕、あれはちょっとね、〔感じが〕ちがう。あれ、暗い。「あつい壁」見て、ええっ、こんなもんだったのかなあ、って。親子関係がこんな冷淡（あれ）だったのかなあと思って。そんなじゃないよねと、ちょっと監督には悪いけど、思ったんだけどね。だから、事件として、あの〔死んでしまう〕男の子の生涯を描いているから、ああいうふうになったのかもしれないけれど……。保母さんたちは、意地悪とかそんなんじゃない

かった。みんなよかった。〔それと、だれの親も〕みんなあれだけど、うちの父はとくにね、療養所にはいたけれど、けっこう自転車で外を出歩いて。遠かっただろうけど、わたしのために〔熊本市内の〕龍田寮にずっと来よったんです。なにかあるたんびに、洋服とかそんなのを準備して。

だから、あの、わたしもそれは記憶になかったんだけどね……。昭和何年かなあ、奄美和光園に高松宮殿下がいらしたときに、うちの母がね、不自由棟の廊下の手摺りを掴んで歩いとるときに、そこでね、「おめめ、悪いんですかあ？」って声かけてくれたのが、殿下だったんで、「すごくうれしくて、びっくりしたあ」ちって、母が感激しとったもんだから、「よかったねえ」ってわたしが言ってあげたら、「よかったね、じゃなくてね、殿下が龍田寮にいらしたときに——やっぱり、黒髪〔校〕事件の鎮静化に協力していらしたのかしらないけれど——そのときに、あんた、高松宮さまに花束をあげてるんだよお」って、わたしに言うから、「ええっ？ なんで、それわかるの？」ちったら、「とうちゃんがね、龍田寮の玄関へ行ってね、〔飾ってある〕あの写真、自分にもくれたらいいのにな、ハルミが写ってるんだけどお、って言いよった」って言うから、ああそう、と思ってしたら、〔あとで〕保母さんがアルバムを見せてくれたときに、その写真があったもんだから、わたし、それから1枚借りて伸ばしたんだけど。ああ、これなんだあって。そのとき着とった服がね、奄美大島に着てきたわたしの洋服。おねえちゃんたちもたくさんおってあるのに、わたしが〔その大役を〕したっちゃうことは、渋谷おかあさんがさせたんだろう。保母さんたちも「あんたは、おかあさんの気に入る子だからねえ」って、わたしに言われたから、そうかあって思うんだけど。ああ、そうだったか、そういうこともあったんだねえっと思って。こうなったら、龍田寮のこともいっぱい聞いておけばよかったあ。〔ただし〕母は龍田寮を知らない。1回も来たこともないし。〔恵楓園から〕出入（ではい）りできなくて。父はやっぱり、健常者だから、療養所におけるけれど、出歩くのになんの不都合もなかったんだろうと思う。

年2回の親子一斉面会

〔龍田寮にいたときは、母には〕そんなにしょっちゅうは会えなかったよ。年に1、2回かな。面会（それ）は厳しかったと思いますよ。会ったあとが大変だったっちゃうことは、口伝えに〔聞いている〕。宮里さんがどっから聞いてきたかね、「あなたたちは〔親と〕面会してきたあとに消毒されとったのよ」っち、わたしに言うけど、その消毒は覚えてないのよね。中学生たちは覚えとったかもしれないけど、わたしたちはまだちいさいから、そこまではわからない。

〔会いに行くときは〕みんな、一斉に。だから、先生、ほら、検証会議のとき、わたしが知らない写真がありましたかね。〔みんなで〕写ってるあの写真、わたしなんか知らない写真だし。保母さんが「ハルミちゃん、〔あなた〕ここにいるでしょ」って、わたしに言ったから、びっくりした。全体で恵楓園のなかで撮ってる写真ね、あのときが面会なのよね。

〔わたしがいたとき、龍田寮の子どもたちは〕50～60人ぐらいじゃないかな。〔部屋は〕年齢別。〔男の子と女の子も〕別。わたしが奄美に来る前はね、けっこう広い部屋で。ほら、お風呂場の脱衣場にある、ああいう四角の棚みたいなのが、自分の物置みたいなかんじで〔あって〕。そして広い部屋に何人かで、

こんなして、布団をたくさん敷（ひ）いたようなかんじは覚えてる。入った当時は4歳だね。そのころはまだ10名ずつぐらいに1人の保母さんが、24時間担当するからね。〔わたしが〕入った当時は、中尾さんちって、いま山梨にいらっしゃるけど、中尾保母さんが担当してくれて。「昼は、なんとか慣れてくるんだけど、夜になったら、『とうちゃん、とうちゃん』——うち、『かあちゃん』っち泣かないの——『とうちゃん』っち泣くんですよお」って、親に報告したみたいだけどね。そんなしたけど、ずんずん、年長になるたびに部屋が広がって、けっきょく、共同生活が多くなって。

〔わたしが奄美に来たのが、小学校〕2年の2学期から。〔黒髪校事件があったのが、わたしが2年生の〕4月。〔わたしらの〕下の子どもたちが本校（がっこう）にあがろうちったとき。その前は、やっぱり、〔本校には〕入れないから、わたしたちはもう、分校というかたちでされてた。〔昭和〕28年の4月に、わたしは1年生になってる。〔昭和〕29年の4月に入ろうとした子どもが、学校に入学（あれ）しようとしたときに、その問題が起こりだして⁹。

⁹ 「黒髪校事件＝龍田寮問題」の顛末について、みておきたい。まずは、2011年11月の晴海さんの補充聞き取りから。

（けっきょく、龍田寮を壊すちう条件で、問題が解決したわけでしょう。だから、保母さんたちはもう、親族に引き渡される子、養護施設に行く子、その時点で次々つぎつぎ、片づけていったんじゃないですか。前、保母さんたちに会ったときね、保母さんたちが〔子どもを〕養護施設に置いてくるとき、もう泣かれて大変だったとか言われとった。そして、「後追いはするな」ちうことだったらしくて。それで、この保母さんたちが、そのあと、恵楓園の職員になってますもんね。うちが会ってる森三代子さんなんかは、園長付きの職員で、退職するまでは、あまり、職員だからしゃべらなかつたけれど、ほら、〔2004年〕5月の検証会議が奄美和光園（ここ）で終わったあとに、〔翌月開催の〕熊本〔の菊池恵楓園での検証会議〕としても、藤本事件と、この龍田寮問題を出したいちうことで、〔弁護士の〕先生が、わたしに、その保母さんたちを〔検証会議に出て証言してくれるように〕説得してくれちうから、保母さんたちに「もう、話していいんじゃないでしょうかあ」って説得したのよ。〔そしたら〕「あなたには負けたわよお。ハルミちゃんが頑張ってるから、わたしたちも出ることにするわよお」って電話もらって。〔で、弁護士の〕久保井〔撰〕さんが森さんの自宅を訪ねて、聞き取りをして〔証言のための原稿をまとめて〕。〔検証会議の当日には〕木村〔チズエ〕さんとふたり、一緒に出ろうやあということで、出らして。

〔龍田寮が黒髪校事件の結果、廃止されたのが、昭和32年。それ以前に、わたしなんかも、龍田寮を出された。それまでは、年に2回の一斉面会のとき以外は、恵楓園には〕行ったことない。奄美大島に帰る前に、1ヵ月ぐらい、夏休み中、いたんじゃないかね。龍田寮から引き揚げられて、親のそばにいつか〔一緒に〕いた時期がある。龍田寮から保母さんたちが連れてきて、品物みたいに、面会室のカウンター越しに、恵楓園の中における両親に渡されたのを、うっすら覚えてるよ、わたし。なにか印象的に。〔父のあとを付いて、園内の溜め池なんかのところに〕行ったってというのは、そのときの話。〕母がちょっと言っとったけど、宮崎松記園長がね、〔わたしのことを〕帰る子と思って、大目に見とったんだらうと思うところもあるのは、パッと見つかってしまつたら、わたしがもう、目ん玉、ギョロツとして、園長にむかって、「あした、帰る！ あした、帰る！」ちうて言つたらしくて。たら、先生が「いやあ、おじょうちゃんに、キャラメルでもあげようと思って声かけたのに、嫌われてしまつた」っち（笑い。）

さらに、長くなるが、2004年6月16日、熊本の菊池恵楓園で開催された「第18回ハンセン病問題検証会議」の席上での、「龍田寮」元保母の森三代子さんの証言を引用しておこう。わたし（福岡安則）じしん、「検証会議」の「検討会委員」として、その場に同席して聞いていた話だ。（なお、一部割愛するなどの編集の手を加えた。）

《森三代子》わたしは恵楓園に近い合志町に生まれ育ちました。昭和27年に保母の資格をとり、28年4月に菊池恵楓園の未感染児童保育所である龍田寮の保母として採用されました。ちょうど予防法が改正された年です。

わたしは、もう1人の保母と2人で、3歳から就学までの子どもたちの青組を担当することになりました。保母は龍田寮に住み込み、交代で当直がありました。1日おきの当直の日は、子どもたちと同じ部屋で眠り、夜尿症の子どもをトイレに連れていったり、おねしょの処理をしたりと、目が回るような忙しさでした。

勤め始めたころ、龍田寮には1歳から中学生まで67人ぐらいの子どもたちが生活していました。親の入所に伴って未感染児童として預けられた子どもたちです。龍田寮の子どもたちと親との面会は、春と秋の2回と決められていました。その日は、恵楓園の中でピクニックのようしてお弁当を食べ、親子が手をつなぎました。けれど、なかには泣いてむずかる子どももいました。年にたった2回の面会では、親という親しみが持てるはずはありません。そういうときは、そばで見ている大変複雑な気持ちになりました。

龍田寮の敷地内には黒髪小学校の分校があって、宮崎先生という退職された校長が1年生から6年生までをたった1人で教えておられました。わたしが保母になった年の12月、宮崎恵楓園長が法務局に、龍田寮の子どもたちに普通の小学校への通学を認めないのは差別だという申し立てをされました。そのことが新聞に取り上げられると、にわかに黒髪小学校本校のPTAが騒ぎ始めました。「病気がうつる」というのです。子どもたちはみな健康でしたから、まったく根拠のない言いがかりでした。しかし、ハンセン病に対する偏見は根深く、反対派は感染の危険はないという説明に耳を貸そうとしませんでした。

教育委員会や行政の指導で昭和29年入学予定の4人は本校に通学することが決まりました。しかし、入学式が近づくにつれて反対派の宣伝活動は激しくなっていました。入学式には反対派が同盟休校を強行し、新聞はその様子を大きく取り上げました。教育委員会などが間に入り繰り返し話し合いがなされましたが、当時の県議会議長で医師でもあった瀬口PTA会長をはじめとする反対派は譲ろうとしませんでした。同盟休校は5月に解除され、学校は平常に戻りました。

けれど、9月から龍田寮に残るほかの子どもたちも本校に通わせるという方針が明らかになると、また激しい反対運動が展開されました。反対派は「黒髪会」という住民組織を結成し、龍田寮の廃止を要求し始めました。寮の前には騒ぎが大きくなるたびに反対派の車が来て、拡声器で「出ていけ！」と怒鳴りたてました。そのつど、また来たと不安がる子どもたちに、わたしたちは、そんな人ばかりじゃないからと励ましていました。けれど、拡声器の怒鳴り声が子どもたちの耳に入るのをとめることはできません。子どもたちの心には深い傷が残ったのではないかと思います。

やがて反対派は、龍田寮の存在自体が「らい予防法」に反すると非難し始めました。患者の子ども専用の施設があること自体が、患者とその家族の秘密を守るという条文に違反しているというのです。——[しかし、ホッネは、子どもたちのプライバシーを]守るというよりも、そこから出ていけというような感じ。龍田寮の子どもたちをその場から立ち去らせるというか、廃止すればいなくなるという、自分たちの利点からそういうことを言ったんだと思います。——対立はさらに激しくなり、ついには国会でも取り上げられました。昭和30年[4月]に1年生になる子どもは4人いました。この子どもたちも本校に通わせることになっていました。しかし、入学式を前にまた

も反対運動が激しくなり、反対派3名がハンガーストライキに入るという事件まで起きました。それがきっかけとなって、熊本商科大学の高橋学長が間に入り、新1年生の4人を学長の自宅に引き取って、そこから本校に通わせることを提案し、最終的にはこれが受け入れられました。

しかし、龍田寮そのものは昭和32年いっぱいまで閉鎖されることが決定されました。このとき龍田寮には38人の子どもたちが残っていました。その全員を親戚の家や県内の児童養護施設に分散させることになったのです。いったん高橋学長の自宅に行った子どもたちも、この計画に従って施設に預けられました。黒髪小学校の校区には児童養護施設はありません。また、親戚に引き取られた子どもたちは、県外などみんな遠方でした。結局、龍田寮の子どもたちのうち、だれ1人として黒髪小学校を卒業できた子はいなかったのです。

子どもたちを分散させるのはとてもつらい仕事でした。ある子どもは親戚の手に渡し、ある子どもは施設まで連れていきました。24時間一緒に過ごし、「おねえさん、おねえさん」と、ほんとうの家族のように慕ってくれた子どもたちです。泣いてしがみつき離れようとしないう子を振り払うようにして帰ったこともありました。別れはほんとうにつらく、見知らぬところに放り出される子どもたちがかわいそうで、涙があふれ、同行していた主任に「結局、負けたのと同じですね」と言ったことがあります。

龍田寮は昭和32年に廃止されました。わたしは、その年の2月に、廃止に先立って恵楓園に配置替えになりました。異動にあたって、宮崎園長と主任から「あなたは龍田寮の子どもたちのアフターケアのためにとどまってほしい」と言われました。「分散させた子どもたちは、それぞれ移動した先で自立しなければならないのだから、けっしてこちらから連絡をとらないように」と言われていました。また、「子どもたちの心に恵楓園という名前は残っているはずだから、いつか訪ねてくる子どももいるだろう。その子どもたちを見届けるためにずっとここにいてほしい」とも言われました。

それからは、龍田寮の子どもたちから連絡があれば対応するのが、わたしのもう1つの役目になりました。龍田寮がなくなってから、子どもたちはよく訪ねてきました。お盆と正月には必ず何人かの子どもたちが泊まりに来て、狭い官舎にごろ寝し、夜遅くまで語り合いました。遠い親戚の家や施設に引き取られ、あるいは就職した子どもたちにとって、龍田寮はなつかしいふるさとであり、心を癒せる唯一の場所だったのではないかと思います。

いまから20年も前のことでしょうか。仕事をしていたわたしのところに事務職員が、「森先生はおられますかと言って、男の人が来ている」と呼びに来ました。なんだろうと行ってみると、見知らぬ男性が立っていました。「ぼくがだれかわかりますか？」と聞くのです。龍田寮が廃止されたとき小学1年生だったBちゃんという子でした。Bちゃんは、わたしともう1人の元保母にご馳走したいと言い、一緒に天ぷら屋に行きました。ご馳走をつつきながら龍田寮を出た後のことを聞きました。引き取られた家には同年代の子どもがいて、「おまえに食わせる飯はない」と、家の中には入れてもらえず、納屋の藁の上で寝たこと。食べ物もろくに与えられず、このままでは死んでしまうと思い、家出をしたこと。それから建築業に携わり、いまは独立して会社を持っていること。Bちゃんが泣きながら語る言葉にわたしたちも涙しました。

もともと引き取り手がないために、親の入所に伴って寮に入った子どもたちですから、親戚に引き取られた子どもたちの多くは、冷たい仕打ちを受けたと聞いています。お盆や正月に訪ねてきてくれた子どもたちのなかには、自殺したのではないかという子もいます。詳しい事情は知りませんが、龍田寮廃止で分散させられた子どもたちは、どの子も人には言えない苦労をしたはずです。

平成2年8月夜、恵楓園に一本の電話がありました。「わたしを知ませんか？」と言うのです。女性の声でした。だれだろうと思い名前を尋ねると「Cです」と言いました。あっと思い、「Cちゃんは、鹿屋〔の敬愛園の未感染児童保育所〕に引き取

られていったけど」と言う、「それがわたしです」と言いました。分散の際に、お父さんが星塚敬愛園に転園して一緒に連れていった子でした。聞くと、いまは結婚して幸せに東京に住んでいるということでした。Cちゃんは堰を切ったようにいろんなことを語りました。なつかしがる彼女に、「一度、熊本においで」と言いました。「龍田寮のことは夫にも子どもにも秘密にしているので、熊本に旅行することなどできない」と言いました。どんな気持ちから50年ぶりに電話をしたのか、どんな苦労があったのかと思います。

わたしはいま、合志町に住んでいます。いまも何人かの子どもたちが訪ねてくれます。ほとんどの子たちは、Cちゃんと同じように、家族にも、龍田寮のこと、親のことを、秘密にしています。わたしのところに来るときだけ、秘密を気にせず何でも話すことができる、そう思っ来てくれているようです。

わたしは一人の職員にすぎませんから、ここでこうしてお話することに大きなためらいがありました。取りとめもないお話で、お役に立てるかどうかわかりませんが、龍田寮のことをぜひ話してほしいと頼まれ、ここに立たせていただきました。当時を思い出しますと、涙して申し訳ございません。

森三代子さんの証言にあるように、「黒髪校事件＝龍田寮問題」は、「龍田寮の廃止」と引き換えに「本校への通学」を認められたはずが、「結局、龍田寮の子どもたちのうち、だれ1人として黒髪小学校を卒業できた子はいなかった」。差別に「負けた」のだった。

さらに、註記しておかなければならないことに、熊本商科大学の学長が引き取るかたちで黒髪小本校への通学が認められたとされる、1955（昭和30）年度入学予定の龍田寮の新1年生は「4人」とされてきたが、じつは、あと2人いたのだ。「龍田寮の保母だった森三代子さんは、今でも思い出すたびに胸が締め付けられるような記憶がある。／1955年2月22日、龍田寮にいた2組の姉弟4人を、熊本市島崎にあったカトリック系の児童養護施設『聖母愛児園』に移した。／4人を修道女に託して帰ろうとすると、まだ4歳ほどの弟の1人がしがみついていた。森さんに最もなついていた子だった。『森ねえのバカ』と泣きわめく子を引きはがすようにしてドアを閉め、森さんはあふれる涙をぬぐった。／この4人のうち姉2人は6歳で、小学校入学直前だった」『宮崎〔恵楓園〕園長と岡本〔熊本市教育〕委員長との懇談記録にはこうある。／『反対派は龍田寮児童中、朝鮮人はその故をもって黒髪校入学は拒否すると主張』（熊本日日新聞社編『検証・ハンセン病史』河出書房新社、2004年、147-148頁）。住民組織「黒髪会」には、ハンセン病差別の意識だけでなく朝鮮人差別の意識も渦巻いていたのだ。

こうして、奥晴海さんの語りや森三代子さんの証言にあるように、龍田寮が廃止になるということで居場所を奪われた子どもたちは、①その子を引取って親代わりになって育ててもよいという考えなどもとまなかった親戚に押しつけられるか、②熊本市内の児童養護施設に移されるか、③恵楓園入所者の親じしんが星塚敬愛園へ転園することで、敬愛園付属の未感染児童保育所に移されるか、それらの移籍先さえ見つからなかつた子どもたちは、④ハンセン病に罹っていないにもかかわらず、ハンセン病患者として、菊池恵楓園内に取り込まれていったのである。さいごの④については、熊本日日新聞社編『検証・ハンセン病史』にも、国立療養所菊池恵楓園入所者自治会『壁をこえて——自治会八十年の軌跡』（2006年）にも触れられてはいない。しかし、晴海さんの語りのなかでも、恵楓園退所者のSKさんが「〔閉鎖された〕龍田寮から行く場所がなくて、何人か〔恵楓園に〕入ってる子たちがおった」ことを言明しているし、あるいは、2011年10月にわたしたちが菊池恵楓園で聞き取りをした入所者の有明てるみさん（筆名、1937年生まれ、1949年恵楓園入所）も、「〔黒髪校事件のあと〕龍田寮から来た子どもが、おったんですよ、少女舎にね。病気になってなかつたけど、

龍田寮にいた在日の子は戸籍上の父子関係がなくて……

〔龍田寮には在日朝鮮人の子もいたか、ですって?〕 ああ、いますよ。Cちゃんとかね。〔裁判のあと〕 東京で1回会ったんだけど。あの子も龍田寮にいっしょにおったんだけど、「自分はどうして龍田寮から鹿屋〔の敬愛園の保育所〕に来たかわからないのよ、それが不思議」っち〔言ってた〕。わたし、保母さんに聞いたら、その龍田寮事件がありだしたらね、「Cちゃんのお父さんが、自分も鹿屋に転園して、いっしょに連れて行ったのよお」っておっしゃった。〔もう、Cちゃんのお父さんは亡くなっている〕あとに〔再婚した〕奥さんがいらしてね。日本〔人〕の。そのひととも会ったんだけど。だけど、〔亡くなったお父さんの分の〕補償金は、そのお継母(かあ)さんには下りたけど、Cちゃんには分けては下りなかったらしい。〔お父さんと〕Cちゃんを産んだ〔母〕親とのあいだに戸籍関係がなかったらしくて、〔実の〕子どもでありながら、Cちゃんには補償金(おかね)はいかなかったらしい。でもね、お継母(かあ)さんの話を聞いたら、外で——お継母(かあ)さんは健常者だからね——一生懸命お父さんと〔いっしょに〕働いたおカネが貯まったらね、けっこう、このCちゃんにもおカネを使ったらしい。だから、今回の補償金(おかね)はね、「もう、あんたの老後のために」って……。

熊本から奄美大島までの、何日掛かりの長旅

〔熊本から奄美大島までは〕それが延々とした旅でね。蒸気機関車のポォーッと鳴る、汽笛かな、いまでもね、あの音は〔耳に残ってる〕。ほら、熊本からずっと汽車で何時間か。いまの鹿児島中央駅じゃなくて、本駅に着きよったの。それから大島(ここ)まで船だけど、あのころの船は、いまの5~6千トン級じゃなくて、小さい船で、何日に1回しか出ないもんだから、父に連れられて星塚の敬愛園(ほう)に行き、母の従兄弟のおじちゃんのところ、次の船が出るのを待つ。あのころは何日掛かりで、気が遠くなるぐらい。そして、船もいまみたいに10時間で来れるっちいうんじゃない。そして、大島(ここ)へ来たら、〔船が棧橋に〕横付けできないから、舢(はしけ)〔に乗り移って〕……。

そして、奄美和光園に行き、おばあちゃんと〔はじめて〕会ったとき、おばあちゃんもハンセン病と知って。そして、〔母方の〕おじいちゃんのとこに父が行ったけど、おじいちゃんへの対応があんまりよくなくて。厄介者が来たみたいなかんじだったと、あとで聞いてるけどね。そして、ほんとはね、父は〔自分の〕お姉さんのとこに〔わたしを〕預けたかったんだけど、お姉さんは亡くなったの。そこに預けられれば、たぶんわたし、幸せに生きてきよったと思うけど、大和村の母の妹のところへ預けられたのが、もう最悪、と言えいいか。もういまは恨む気持ちもないけど、なんで、こんなところに連れて来られたんだらうかあと思って。

叔母の家に預けられて、我慢我慢の生活

〔叔母は〕おんなし集落のひとと結婚したんだけど、〔その夫は〕自分が外に女をつくったのは棚にあげとって、けっきょく、おばあちゃんと母の病気のこ

なっただけという名目(あれ)で、何人か入ってきたんですよ」と明言している。

とで、ほら、「ガシюнチューヌ、クワンキヤーヌ」じゃないけど、そういう血統のひとつたちちうことで、〔叔母は〕2人子どもを産んでから離婚して、母子生活しとったところに、〔わたしが〕預けられた。その2人の子どもがわたしより年が下だから、けっきょくそれが、つらい生き方になったけどね。

いま考えたら〔叔母も「らい予防法」の被害者だけど〕、でも、育つときは、もう、クツソオ、このオバめえ、と思ったよね。だって、外づらがいいために……。外づらがいいひとちうのは、家の中はもう、悲惨なものですよ。うちのじいちゃんたちも商売柄、外づらだけよくして生きてきてるから。そのつらさね。叔母との生活は、ほんとに、もう、もう、大変な生活だった、ほんとに貧困で。

叔母さんは、〔仕事は〕紬をちょこちょこ織ったり、他家（ひと）のところで、ユイワクちって、畑手伝ったりとか。ユイワクちって行けば、おカネじゃなくて、なにか物をもらわれるでしょ。そういうことなんかしながら、〔なんとか生活〕しよったけど。とにかく、あのころは、海が時化（しけ）て船が止まったら、陸でうちの田舎から和光園（ここ）まで来るには、7里8里の道を歩かなければ来れない。1日がかかり。そうしながらでも、叔母といっしょに来て、おばあちゃんのとこ行って。おばあちゃんが、わたしたちを心配して溜めてくれてる醤油とか缶詰とかいろんな食べ物、おばあちゃんが節約して残してくれたのを、いっぱいもらって帰って。そうして持ってくるけども、この叔母がまたチャランボランでね。それをみんなにホイホイ、バラマキじゃないけど、自分がかわいそうなくせに、他人（ひと）がかわいそうになって、そうするから、わたしは〔これだけ〕持っていけば何日かの分はできるうちゅう、そういう期待（あれ）もあるのに、そういう〔惨めな〕生活をずうっとしてきた。

考えてみたら、叔母もそのとき30代でね。そんな年だったんだらうと思うけど、朝早く「起きれ、起きれえ」ちって起こされてね。田舎はいまはブロック塀だけど、あのころは竹の塀。朝起きて、塀の竹、先を折って、火をおこして¹⁰。それからご飯つくろうちししても、食べるのはないのよ。だから、お味噌だけをぐうっと掻き混ぜて、そこに芋でも切って入れて。そないしてご飯つくったりしながら。で、叔母たちが昼、他家（ひと）の仕事に行けば、学校から帰ってみても、昼ご飯、食べるの、ないの。ないから、水一杯ぐらい飲んで、また学校に走ったりしながらの、そういう生活のなかで、叔母が、他家（ひと）の茅葺き屋根をつけるために、茅刈りして、〔茅を〕おんぶしてくる途中に…

¹⁰ 奄美大島のひとたちの暮らしぶりの一端が垣間見える、2010年10月の補充の語り。
 〈だから、あのときの大島の状況が、屋根も、ほら、茅葺き屋根だったからね。いまは塀も、ブロック塀とかなってるでしょ。あのころは、ほら、七夕を下げるような竹があるですがね。あの竹を取ってきて。大きな木を切ってきて、1メートルごとに軸にして、横をあれして、そこに竹を挿して行って、垣根をつくるんですよ。正月正月に。〔だから〕お正月には、竹の葉もあるし、もう、びっしりしてるけど。あとは枯れて行って、葉っぱも落ちてくると、骨みたいな、小さいあれになってくるでしょ。それを小さく折って〔そこに〕紙を置いて火種にすると、〔火を〕おこしやすいわけ。竹が枯れてきたときには、火をおこすのに、上等ですがね。先々をちょっと折って、紙へ点けてしたら、マッチ1本で〔火を〕おこせる。〔だんだん〕垣根、なくなってくるよ。あとはもう、ガラガラになって、お正月〔前〕ごろには、塀の垣はもう1本、2本になって。アハハハハ。そういう生活の智恵。〉

…。ここらへんは平地になってるけど、うちの大和村は 500～600 メートルぐらいの山で、急勾配なのね。そこで足を傷ませて、ギブスは巻くし。こんど、隣のおばちゃんに芋掘りに連れて行かれるけど、芋も植えつけて何ヵ月もなっていない、芋もまだ入っていない。

そういう悲惨な生活 (あれ) しなげらうとやってきたけど、4 年生の 6 月ごろかな、わたし、麻疹 (はしか) もらったの。麻疹っていうのは、はっきり覚えてるけど、ほんとにもう高熱がでて、その後に、上からずっと発疹がでてくるのね。ずっと出ていって、発疹 (それ) が下にさがりだしたら、体がほんつとにだるくて、おんぶされたい、いくらでも甘えたいぐらい、だるかったのね。あのときね、どんなに父と母を……。あのときは熊本 [の恵楓園] に父ちゃんたちがいたけど、連絡するにも電話もないし。泣きながら、ずうっと我慢して。もう、ほんとに我慢、我慢、我慢しながら生きてきた。親を、クソオツ、こんなところにわたしを置いてえ、と思ひながらね。

おカネがなければね、叔母の従姉妹のとこ、おばちゃんたちのとこへ、わたしに「借りてこい！」っち、叔母が言ひよったの。わたしはもう、それがいちばん嫌で。行かんば、もう、叩かれる。叩かれるっちいったっちゃ、あの、火を、フッチって吹く、火吹き竹で叩かれて。[そのあと] 外に出されて。ずうっと軒下でいたずらしながら、こないして考えこんでしてると、あとは、「家に入れ」っちゃ、入るし。あとは、わたしも嘘を覚えて、庭先まで行くことは行くけど、「いなかった」ちって帰ってくる。行ったフリして帰ってきよった。「金銭借りてこい」ちって、借りに行くそのつらさ。もう [なににも] 食べなくていいがあとと思ひて。だから、空腹時期はどれだけ過ぎたかわからない。

父の死と母の和光園転園

[小学校] 4 年生の 12 月に、父が亡くなったのも、電報が届いたの遅かったしね。[翌年の昭和 32 年の 1 月に] 母が [奄美和光園に] 帰ってきて¹¹。それ

¹¹ 2010 年 10 月の補充の語り。〈ひとつ [言い] 落としてる、母のことで。母が奄美和光園に帰ってきたときに、父親が「猫いらず飲んで死ね」ちった。そのとき 1 回だけ、和光園の [寮の] 玄関に訪ねてきて、「病気を治して帰ってくるっち思えば、その姿で帰ってきて、自分が猫いらず買って持ってきたから、飲んで死なんね」ちった。それから [母の父親は] 何十年生きとったけど、もう絶対、面会にも来てない。〉

さらに、2011 年 11 月の補充の語り。〈母が言ひよったのは、父がね、わたしを連れて奄美に帰ってきて、母の父親のとこに寄ったときに、何を言われたかわからないけど、[恵楓園に戻ったときに]「スミエ、あんたの父親は人間と言われるうちには含まないぞ」っち、母に言ったらしいよ。そういう言葉を、とうちゃんが言ひよったちうだけは、母親は一言、言ひよったけどね。だから、「猫いらず飲んで死んでくれ」ちう言葉を言ひよったっきり、もう二度 [と] 会うことなかったもんね、母と [母の] 父の関係はね。でも、じいさんが亡くなるのが 89 歳に入つてのころだったけど、死ぬ前に、わたしの母親に「自分がすまんだったち、言えよお」ちは、わたしに言ひよったけど。やっぱ、[母を自分の] 子どもとして扱わなかったちうことに対して、気になつとったかもしれんとは思ひけど。〉

なお、1956 年 12 月に父親が熊本の菊池恵楓園で亡くなり、翌 1957 年 1 月には、母親が奄美和光園に転園したことについて、晴海さんは、こう補充した。〈母は、夫が亡くなって] 四十九日にまにあわせて、お骨 2 つ持ってきた。うちの弟のと。だから、ほんと言ひば、あの熊本の納骨堂に置けるんだけど、やっぱ、田舎のしきたりちうの

から、まあ、母をほんとに好きであったから行ったんじゃないんだけど、やっぱり、田舎にいるよりか、毎日の生活、心配しないでいいって思うようになったときに、春休みの2週間、夏休みの42日、冬休みの2週間、しっかり園に行けば、生活の心配がないから。和光園(むこう)におったら、食べることに心配ないし、もう、そのために رفتったようなもんですよ¹²。で、帰るときには、いっぱい、ばあちゃんたちが準備して[くれて]。ちょうど、そこの山の上の、名瀬が見えるところまで送ってくれば、まだ母が[恵楓園から]来ないうち、ばあちゃんがね、「重たいから、つぎ来るとき、持って帰れえ」ちうけど、わたしが「ばあちゃん、うちに行けば、なんにもないよお」ちって言ってね、無理して、ちいさいからだでおんぶして、ずうっとわたしがぐだっていくのを見ながらね、何回泣いたかわからないち、ばあちゃんは言いよったけどね。そんなにして持ってきたら、また最悪で、叔母がバラバラバラバラ、かわいそうなおばさん連中とかにまたやるし。

だけど、ある時点から、わたしも、ほら、経済観念を持つようになって、これを置いとけば何日か[食べることが]できるのにねえって、つくづく[思うようになって]、叔母との喧嘩が絶えなくなりだして。わたしもある程度、頭もまわってきたから、口ごたえもするようになったし。家庭内では、ふたり喧嘩。「自分に口返答する」ちって叩かれる。手で叩かないよ、棒で叩きよった。わたしが打ち返すちうことはなかったけどね。

学校の先生や保健所の職員の手助け、そして恵楓園の父の友達

そうしながらでも大きくなってきたら、5年生の9月かな、叔母が卵巣に腫瘍ができて、大きな手術で、名瀬(ここ)に来て。2~3週間、家を空白。近隣(そこ)に叔父なんかがおるけど、叔父なんかも自分たちの生活が一生懸命で、ぜんぜん手助けなかったけどね。やっぱり、外からいらしてる——ほら、[おなし村内]出身の教員というの、依怙最厚(えこひいき)があったけど、他島からいらしてる先生たちには、いい先生がいらしてね。宮崎からいらしてる担任の先生も、とつてもいいひとで、「叔母さんが帰ってきたから帰りなさい」とかいつて返してくれたたり。また、徳之島からいらしてる先生がね、「運動会時期だから、ハルミのために、おにぎりぐらいつくってあげれえ」ちって自分の奥さんに言ってね、つくってくれたり。だから、学校には、病氣しないかぎり、[叔母から]逃げてでも行きよったですよ。

[教科書?]教科書なんかは、配給だったよ、あそこ。そしてね、父が亡くなったあと、父の友達でね、恵楓園にいらしたシバタさんちおじさんが、すごくかわいがってくれてね。わたしが中学校卒業するまで、小学館発行のね、雑誌(ほん)を、年間契約して、わたしにひと月1回ずつ、ずうっと送ってく

を、着実に守つとつちうことかもしれん。納骨を故郷(ふるさと)の[お墓]にさせたから。)

¹² 2010年10月の補充の語り。〈園内で映画が上映されることがたびたびあった。1957年の松竹映画の「喜びも悲しみも幾歳月」だけは覚えとる。だって、名瀬で[上映]しないうちに封切りだもの、和光園(こっち)は。でも、母に連れられて行くけど、もう最初からずうっと眠り。あのときに覚えてるのは、映画の前のニュース。あのときに水俣病が、もうしょっちゅう言われたしたころね。それで、肝心の映画のときは、ずうっと眠り。)

ださって。わたしもそれに甘えてね、何がない、何がないちう手紙を書いたらね、学用品なんかも送ってくれたりして。わたしが中学2年生のときね、奄美に会いにいらして、あの〔退所者の〕MTさんの奥さんとね、3人、ずうっと奄美大島、見学してね。ほんとにもう、足ながおじさんみたいなもので、かわいがってくれた。

だから、つらい面もあったけど、なかにはいいこともあって。そしてまた、保健所からいらっしゃるタカギさんてひとも、とってもいい方で。わたしは、奄美大島に来てからね、援護金が出とったのね。龍田寮から出た子どもたちは、たぶん〔みんな〕そうだったと思う。国が〔面倒を〕みたばあい百パーセントみなければならないけど、身内に預けた場合には、その何分の1ですむということで、わずかだけど出とったんですよ。でも、あのときは、現金封筒で来て。受け取って、受取証を返さなければならなくて。そのころ、叔母もほら、あんまりそういうの書ききらなくて、わたしもまだ小学校3年生、4年生ごろで、その上書きを書くということがわからなくてね。わたしは学校に封筒を持って行って、担任の先生に、「先生、これ書いてくださーい」とお願いしたら、「どれどれどれ」って、書いてくださりよったけど。6年生ぐらいからは自分で書けるようになったもんだから、わたしがそれはぜんぶあれしよったけど。そういう関係もあってか、〔保健所から〕タカギさんがね、ちょいちょい見えよった。なぜ、わたしに来るかということが、わたしは不思議だなあと思いながら……。でも、ほんと、人間はいいひとで、わたしが中学校卒業するときに、「今後どうする？ 上の学校へ行くかあ？」とも言わしたけど、そのときにはもう、叔母とかじいさんとか、それまではほったらかしとったひとたちが、こんどはもう、とにかく手っとり早く使わなければ損みたいに、「使え、使え」ちうことになってきて。自分の意思も聞かないで、「紬織り、せー、せー」ちうて。あの、和光園の看護婦長さんからもね、「ハルミちゃん、〔療養所付属の〕看護学校へ行きなさい」ちうて、勧められもしたけど、けっきょく、こっち側のほうに押さえられて。「こんな〔病気の〕ひとの子どもが、そんなンする必要はない」ちうて、頭から押さえつけられてね。とにかくもう、中学校卒業するまでが、波瀾万丈。叔母がもう、ほんとに、手ぐすねで、なにしとってね。

身内を責めることになる裁判はやりたくない

でも、いまになってみたらね、ほんとに、〔叔母も〕30代そこそこで大変だったんだろうなあと思うし。だから、宮里さんが「〔家族の立場で苦労させられたことを訴える〕裁判しよう、しよう」ちうても、「この年になったら、叔母の気持ちもわかるし、いろんな〔ひとの〕気持ちもわかるし。それで闘う気は、もうない」と、わたしは反対（あれ）したんだけどね。裁判というのは、やっぱり、嫌なことをぜんぶ吐き出さなければならないし、そういうことはしたくないーい、ちう。

家で勉強したことない

だから、家で勉強したことない。家に帰ったら、洗濯盥（だらい）はないけど、〔竹で編んだ〕ソーケにね、洗濯物を入れて¹³。あのころはまだ川もきれいか

¹³ 2010年10月の補充聞き取り。〈「ソーケ」ちう、竹で編んだ〔浅めの〕籠よ。桶じ

ったしね。川に持って行って、固い石鹸あれして、石の上で洗って。そして、干して。家に帰ったら帰ったで、するのばかりで。たまぁに夏なんか遊びすぎて。ほら、海へ泳ぎに行けば、30分で帰ればいいけど、4時間も5時間も友達と遊びすぎて、疲れて帰ったあげくに、怒られて、叩かれる。叔母もウッポン晴らしだったかしらないけどね、そうとう叩かれましたよ。

〔学校の先生は〕都会からいらっしゃる先生とか、他島の先生はよかったよ。でも、おんなし村内とかの先生たちは、やっぱり、いいうちの子どもとあれとの依怙最負みたいのが出るのはわかっと思ったけれど、自分がやれるもんはやれるし。だってもう、家でまんまつくりばかりしてるもんだから、家庭科なんかは、イの一番でうまくやれるし。実生活で身に付いたものに対しては、もう負けるわけないわけだし。負けるのちったら、勉強面ではぜんぶ落ちるかもしれないけど。まあ、学校で集中してやれる分やって、できない分はしかたない。試験があるっちいっても、家で勉強できるわけじゃないし。あのころ、電気も時間的に点きよったし。わたしたちが中学校卒業するまでは、まだ赤い球（きゅう）で。その1つの球で、その下で勉強するわけにいかないしね。帰ってからは、お粥（かい）さんつくるのに、蘇鉄（そてつ）の実を割ってあれして、ずうっとしていくのに、それも時間かかるし、勉強なんかできる状態じゃなかった。

〔蘇鉄の実は〕灰汁（あく）抜きをしてね。灰汁抜きをしてから、干したのを、こんど炊くときに、またそれを膨らして、それを割って、粉にして。それから、いまはお米もいっぱいあるけど、あのころは、3リットルぐらいの水に、一掴みの外米をパッと入れて、それで沸かして、そのあと、こんなして漕いで入れて、炊いてあげるんだけど。わたしが3年生か4年生のときにね、見様見真似でしとったら、隣のばあちゃんが「かわいそうにね、ヤマトから来て、ここまでせんばならんかい」ちって、わたしを見て泣いたちって、あとで笑い話になったんだけど。「鍋もたぎってないのに、かわいそうに、独りでしとった」ちって。あとはもう、うまく炊けるようになったけどね。

学校が救いだっ

〔熊本の龍田寮から奄美に来た当初は、ことばに困らなかったか、ですって？〕困った。言ってるのが訳わからん。ほら、父親がわたしを置いていくために、隣の集落に3日ぐらいおって、また、わたしのところに3日ぐらいおって、そうしてるうちに、騙しだまし、おらんようになったから。して、〔わたしに会いに〕来るたびに、島のひとと、夜にこんなして、座談して遊ぶときに、父ちゃんがわたしを膝のうえに抱きよったみたい。だから、うちの叔父の嫁がね、「親があんなに横抱きする子じゃが、〔膝から〕降りきるかねえ」ちって島ことばで言っったことはね、何を言ってるかね、と思ったけど。あとで自分が解釈ができるようになったときに、悪口だったって、自分で考えたけどね。言ってることはみんな、厭味（いやみ）なのよ。でも、ことばがわからなくて。

やない。こういうね、芋なんかを洗うソーケがあったの。平ぺったくて、ちょっと大きくてね。洗濯盤（だらい）とかないから、〔洗濯物を〕それに入れてって、川で洗いよったから。水を入れたら、ザーッと漏れる。ただ、洗って、絞って、持つてくることにはできるということ。）

あとは、聞いて覚えてくうちにわかりだして。何年かしたら、父のお姉さんの子ども、にいちゃんたちが、「[ハルミも] 島ユムタ、もう、丸出しになってきたがぁ」ちって笑いよったけども¹⁴。

〔でも〕学校へ行ったら、標準語で勉強とかはしてるから、それは不自由なかった。〔休み時間も〕標準語で、あんまり困らなかったけど。ほんと、学校が救いだったかもしれない。もうね、2、3分でパッと行けよったから。もう怒られながら、なに言われながらも、カバン持って、パッと走りよったし。学校に逃げて行けば、一日中、家のことせんでいいから。その楽しみ。そして、あるときからね、ユニセフのね、脱脂粉乳のミルクが出だしたの。あれがだいぶん救いになった。おいしくはなかったけど、空腹をしのげた。

実味噌を背負って和光園へ

田舎から〔和光園に来るのに〕、いまみたいな交通機関ないとき、小さな、5トンぐらいの、漁船みたいな船、あれが定期船だったの。だから、波が静かなときは船で来る。2時間で来れよったのよ。あのころ、テルにね、田舎でつくる実味噌（なりみそ）を、おばあちゃんのために、2、3キロ、準備するのね¹⁵。それとか、田舎でつくるお芋がおいしいのよ。それとかを入れて、その船で2時間、ここまでずうっと来て、そこの、船着場で降りて。そのテルを、こうして背負って、ずうっと歩いて。先生、〔窓から〕鉄塔が見える？ ほら、山の稜線に4つ鉄塔が見えますでしょう。あそこらがちょうど頂上付近になると思う。そこからちょっと下りてきたら名瀬〔の街〕が見えるんだけど、そこをクネクネクネクネしながら、ずうっと登って。それ歩いていくのも、わたしの足でだったから、朝早く船乗ってくるけど、〔園内の〕火葬場の下におりるときは、もう昼の2時。だからね、〔追悼式典の原稿に〕「ケモノ道を通り、ハブや人さらいの姿に怯えながら」ち書いたのは、あのころね、療養所の、ちょうどあの火葬場の下にね、〇〇さんちってね、変な男のひとがおって、女の人たちが

¹⁴ 2010年10月の補充の語り。〈あのね、父のお姉さんの子どもちったらね、田舎、おんなし大和村だけど、大棚と戸円になるわけね。わたしは戸円の母方で〔大きくなった〕。父方のほう、おんなし島の言葉でも、ちょっと発音が違うのよ。だから、「島ユムタ」ち、わたしはここで言ってるけど、戸円のことを「ティン」ちち言いよった。だから、父方のほうの従兄（おにいちゃん）たちにしてみれば、母方のところの集落の言葉の音が出てくるから、「ティンユムタ、丸出し」ちって言いよったの、ほんとは。〉

¹⁵ 「テル」と「実味噌」についての、2010年10月の補充聞き取り。〈テルは〔背負い籠と言えいいかな〕。ほら、都会のひとは、〔脇のところで〕こうして〔抱えるように〕するでしょ。島のひとは、頭に〔紐をかけて〕おんぶする。〔和光園のばあちゃんのとこに、芋と味噌を持って行ったときは〕小さいテルで。だって、手には持ちきれないよ。山道歩くのにはテルがいちばん大丈夫だもん。味噌は、島でつくる実味噌（なりみそ）。赤い蘇鉄（そてつ）の実をずうっとあれしていく。〔蘇鉄の実を「ナリ」ちちいう。〕それを、麴で発酵（あれ）さしていくまでには、日にちもかかるし。それで、こんど、お粥（かい）さん炊いたり。そのね、蘇鉄の実だけじゃなくて、それに、大豆が入るし、玄米が入るし、けっこうおいしい味噌ができあがるんですよ。ふつうのお味噌汁用は、実（なり）と豆だけでしよったし。お茶請け用には玄米が入りよったわけ。おばあちゃんなんか年寄り、島のお味噌を楽しみに待ってるし、そしてまた、「ヤマトバナヌ」、ヤマト芋ちってね、特別においしい芋ができよったのよ。薩摩芋だけど、おいしい芋ができよったから。〉

和光園から買い出しに行った帰りを、途中で待ち受けて襲ったりしよったことを、小さいながらで聞いているもんだから、その怖さを表現したかったんだけど。だから、やっぱ、怖かったのは、ハブと、ひとと出くわしたときの怖さだから。もう、1人しか歩かれる山道で、ほんとに必死。だから、和光園の火葬場の下に、むかしは園の水源地があったんですよ。そこなんかは、もう夢中で走って下りよった。いま、李(すもも)の木が植えてあるところに、豚舎があったんですよ。早く下りれるときには、そこで母たちが豚に餌やっているときもあったし。ちょうど母たちが家に帰って、ホッとしたところにわたしが着いたときもあったと思うけど。

そのころの〔見張り〕担当〔の職員〕が〇〇さんという方と〇〇さんという方なんですけど、そのふたりに見つかったら追いつ返されるちうけど、午前中うちは職員が、ほら、動くがね。治療とかいろいろなので。職員うごくから、ずうっと母の部屋でじっとしてって、夕方ぐらいになったときに、中におるおじちゃんたちが、「自転車、乗り方、教えるから、出てこい、出てこい」って言うから、職員が帰ったあとは、楽しく遊びよった。だから、〔入所者自治会長をしたこともある山本〕栄良(えいりょう)さんが、「おまえが来て、何十日もおるちうこと、職員はわかっとして、スミエも怒られたりしたかもしれんけど、もう、それには動じなかったよやあ。やっぱ、かわいそうに、来てる子ども帰すわけにいかんしやあ」ちって笑いよったよ¹⁶。

和光園でわたしのために働いた母

〔母はハンセン病になっても〕手とか指とかは、生涯、切れなかった。2本〔の指〕が曲がったままだけど。あの、ほら、プロミンの副作用でかなにかわからないけど、皮膚に〔ハンセン病特有の〕表情が、やっぱ出てましたね。そして、わたしが田舎に預けられているために、和光園(ここ)で小遣い稼ぎするために、園のなかで、豚小屋の餌をやったり、母のいる「二寮」の、寮長したりして¹⁷、少しずつおカネ儲けて。そういうのが崇ってかなにかわかな

¹⁶ 2010年10月の補充の語り。〈だから、山本栄良さんが、「たぶん、おまえなんか来て、長期おるちうことは、職員なんかもわかっとして、スミエも注意されたかしらんけど、わが子が来てるのに追いつ返すひとはおらんかったかもね」とは言うけど。〔じっさい〕わたしも追いつ返されなかったよ。もう〔休み明けの〕ギリギリまでおったし、また、帰るときになったら、やっぱ、田舎に帰りたくなくなるのよ。だって、中のひとの雰囲気は楽しいし、田舎に帰ったらまた自分がするのの現実が見えてくるから。もう、ほんとの難儀よ、先生。母たちに送られて、山越えて、あの名瀬が見える、そこまで送られて来て、「もう〔自分で〕行けよお」ちって、わたしが下においていて、港まで行くの、ずうっと母なんか見て、やったと思って寮(いえ)に帰ってきて、ホッとするとところに、またわたしが戻ってきて、寮(いえ)〔の前〕にポツンと立って。そういう繰り返しだったと思います。だから、〔退所者の〕〇〇さん、「ハルミちゃんと〔園内で生まれた〕シゲアキ(仮名)は、半分は和光園で育ったようなもん」いうて、冗談でいまでも言うけど、それくらい、休み期間中はずっとおったと思う。交通も不便だし。1日2日来て〔帰る〕ちうことは〔ない〕、いまみたいな便利なあれじゃなかったし。〉

¹⁷ ほかの箇所では、晴海さんは、母親がいたのは「桜寮」だったと語っている。この点についての2011年11月の説明の語り。〈わたしが小学校のころは、〔奄美和光園の寮の名前は〕「曙」「桜」「桃」っちなったのよ。〔母がいたのが〕「桜寮」。ばあち

いけど、緑内障がきて、失明状態になりだして。

わたしが中学校卒業するまでは、まだ、そこまでじゃなかった。わたしのために働いて。だから、貧しかったけど、着るものとかそういうのは、母が和光園（こ）の裁縫場とかから、端切れみたいな布（きれ）買って、洋服とかいろんなのを作ってくれてたから、着るものとかには困らなかったけど。

未婚の母に

〔2010年6月22日、東京の全国都市会館で開催された政府主催の「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」の式典で、わたしが読み上げた原稿¹⁸は、弁護士の方の久保井〔撰（せつ）〕先生が、とにかく、わたしにボンボン

やんがいたのが「曙」。でも、あとは、上（うえ）上（うえ）に、舎（いえ）が建ってきたら、寮名が〔「曙」「桜」「桃」から〕「一寮」「二寮」「三寮」になってきたわけ。そして、上の不自由舎ちゅうのが、「四寮」「五寮」「六寮」っちなって。山端（やまはし）に〔できたのが〕「八寮」。そして、壮年の男性ばかりおととこが「十寮」ちって、呼び方が変わってきたの。〔だから、和光園の〕中におったひと、若いころおったねえちゃんたちは、「桃にいた」っちなうしね。）

¹⁸ 以下は、政府主催の式典「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」（2010年6月22日）で奥晴海さんが読み上げた原稿。島ことば混じりでの語りをもとに「久保井先生、よく書いたもんだね」と晴海さんが感謝しているとおりの見事な文章化だが、1点、「黒髪小学校事件」が起きたのは、昭和29年4月であるから、そこだけは勘違いとなっている。

* * * * *

わたしは、奄美大島からまいりました奥晴海と申します。わたしの両親はともに奄美大島出身で、母は、戦前にハンセン病を発症し、鹿児島県の星塚敬愛園に收容されました。けれど戦争の混乱に乗じて脱走し、いっしょに逃げた父と籍を入れ、福岡県筑豊の炭鉱で暮らしているときにわたしが生まれました。両親の逃亡生活は長く続かず、昭和25年12月26日、夫婦ともに菊池恵楓園に收容されました。父はハンセン病ではなかったのですが、足の障害が出ていたので、「夫婦同体だ」といわれ、いやおうなく入所させられたそうです。4歳だったわたしは、両親から引き離され、未感染児童保育所である龍田寮に入れられ、昭和28年4月、保育所の敷地内にあった分校に入学しました。ちょうど黒髪小学校事件が起きたところで、外の子どもたちから石を投げられたこと、分校の前に大人が集まってワァワァ騒いでいたことを覚えています。

翌年の夏休み、わたしは父に連れられて奄美大島に渡り、母の妹に預けられました。当時の奄美大島はアメリカから返還されたばかりで、わたしが預けられた集落は、電気もなく、夜は真っ暗でした。まわりを高い山に囲まれていて、まるですり鉢の底に落とされたようなかんじでした。そんなところに、父は、わたしをひとり置いて、はっきり別れを告げることもなく、騙すようにして、いつのまにか恵楓園に帰っていました。奄美に来てはじめて、母方の祖母もまたハンセン病で奄美和光園に收容されていることを知りました。わたしが預けられた叔母は、母や祖母の病気のことで離婚させられ、ひとりで幼い子ども2人を育てていました。わたしはその叔母から幾度となくつらい仕打ちを受けました。寒い冬の空に、家の外に出され、樹の下から星を見上げて声をこらして泣いたこと。はしかにかかったとき、看病してくれる人もいず、ひとり高熱と身体のだるさにうなされながら“なぜ、母ちゃんは来てくれないんだろうか”と恨んだことなどを思い出します。小さい集落のこと、祖母と母の病気のことを知らない者はおらず、わたしは島のことばで「ガシユンチューヌ、クワンキヤヌ」と、「病人の子ども」とあからさまに蔑まれて育ちました。

昭和32年1月29日、母が恵楓園から奄美和光園に移って来ました。前年の12月

10日に恵楓園で亡くなった父と、筑豊で生まれてすぐに亡くなったわたしの弟と、小さい骨壺を2つ抱えての帰郷でした。2人のお骨が、父の姉のお墓に納められました。それから長期の休みのたびに、わたしは和光園に忍び込むようになりました。職員にみつかりと追い返されるので、必ず裏道を通りました。朝早く、芋と味噌を入れたカゴを背負い、2時間船に乗って名瀬の港に着き、そこからさらに山越えをして、ケモノ道を通り、ハブや人さらいの姿に怯えながら、母恋しさに、和光園の火葬場近くに駆け下りました。職員の目を盗んで母に甘え、夜は狭い布団にもぐりこんで母といっしょに眠りました。わたしが安らげる場所はそこしかありませんでした。中学校を卒業すると紬織りの仕事につきましたが、そこでも「病気の子ども」と言っではじめられました。運命とあきらめ、歯をくいしばって生きてはきましたが、ときには“どうして、わたしだけがこんなに難儀するのか”と親を恨み、逃げ出したくなりました。

昭和57年、わたしはありのままのわたしを受け入れてくれる人と出会うことができ、結婚をし、やっと田舎を離れることができました。母がわたしの家を訪ねたことは一度もありません。和光園の外に出ることじたい、ほとんどありませんでした。わたしが訪ねるたびに母は、申し訳なさそうに「いつまで通わすかねえ。自分が早く死んだら来なくてよくなるのにねえ」と言っていました。母は晩年、脳梗塞の発作を繰り返して、平成8年6月28日、息を引き取りました。亡くなるまでの2ヵ月間、わたしはずっと和光園に留まり、付き添っていました。和光園でおこなわれた法要のあと、骨壺は引き取ってはいましたが、平成15年にお墓をつくって、父と母、そして弟のお骨を納めました。

両親と祖母のことを、わたしはずっと誰にも語ることなく、自分の胸にしまってはいましたが、はじめて話をしたのは熊本判決のあと、遺族提訴をしたときのことで。黒髪小学校事件のこと、龍田寮のこと。父親の自転車の荷台から見た恵楓園のヒノキ林のことを、問われるまま、記憶を手繰りよせて語るうちに、それまで夢の中のことのようにはっきりしなかったさまざまな思い出が甦ってきて、失った子ども時代を取り戻せました。過去と今がつながり、自分が何者か、ようやくわかったと思いました。同時に、これが10年か20年前にできていれば、わたしの人生はどんなに変わっていたらという後悔も募りました。

わたしは両親がいたにもかかわらず、「らい予防法」のために、孤児として生きなければならませんでした。日本にはわたしのようハンセン孤児がたくさんいます。裁判をきっかけに、そんなハンセン孤児のいくびとかと知り合うことができました。いま、わたしたちは、「れんげ草の会」という遺族・家族の会をつくって年数回の集まりをもっています。このつながりは、わたしにとってかけがえのないものです。おなじ秘密と悩みを抱えて生きてきたハンセン孤児の前では、安心して語り、裸の思いをぶつけあうことができます。それぞれ事情を抱え、ときには大喧嘩になることもありますが、どんなに言い合ったあとでも、奥深いところでつながった友達であるという確信は揺らぐことはありません。けれど、こうしたつながりをもつことのできた人は、ほんとうにわずかです。大半のハンセン孤児はいまだに声を上げられず、つながりをもてず、自分の中に隠しもった秘密の重さに苦しんでいます。

6月22日、「追悼の日」と定められ、追悼式がおこなわれることになったことを、わたしは昨年、ニュースではじめて知り、愕然としました。とりわけ、病気でもなかったのに収容されて、若くして命を失った父の無念を思うと、心が震えてどうしようもありませんでした。わたしは、いまもたびたび和光園を訪れます。和光園にかぎらず、園の納骨堂はどこも、つねにたくさんの花や蠟燭、線香でまつられ、お参りする人も姿が絶えません。熊本判決ののちには大臣や副大臣も訪れてお参りをしています。けれど、わたしの両親をはじめ、家族が引き取ったお骨はどうでしょうか。限られた家族が人目を気にしながらお参りするだけ。多くは、それさえかなわずに荒れたままになっているのではないのでしょうか。国や県が反省し追悼するというのなら、そのよ

言わして。「言いたいこと言ってください」ちって。「れんげ草の会に対してどう思いますか？」ちうこと聞いたり、そしてまた、「国に対してどう思うか？」聞いたけど。久保井先生、よく書いたもんだね、とわたし思うのよね。わたしが方言で言ってるのに。

「ガシynchューヌ、クワンキヤーヌ」という侮蔑のことばを言われたのは）他人（ひと）じゃなくてね、身内。もう、身内みんなによ。叔父とか、じいさんとか、みんな。けっきょく、「[病人の子どもくせに]目立つようなことはするな」って。だから、なにかをわたしやりたいと思うけども、ほんとに、引っ張られて、押さえられて。だから、「ガシynchューヌ、クワンキヤーヌ」。目立って、そんなことすれば、他人（ひと）に笑われるっちいうこと。だから、やりたいことも押さえられるし。わたしも、そのうちにストレスがボンボン溜まっていくし。クソオツと思ってね。

けっきょく、じいさんは、わたしが叔母に育てられてるから、「叔母のこと、せんば、せんば」ちってね。なんち言えばいいかね、一種の奴隷とまでは言わないけども、そういう扱い。でも、わたしは、ずうっと、黙って紬を[織った]。だからもう、ほんとの差別は、じいさんたちがいちばん多いの。そしてね、機織りも、とくにできたの、わたしは。

そして、ある時期に、ウップン切れて、わたしも20歳（はたち）のときに飛び出して、失敗して、子ども1人産んでね、帰ってはきたものの、もう、これから先……。自分で考えたことは、自分が失敗して、こういう子どもをつくったちうことは、自分でしでかしたことだけど、まあ、わたしの人生かなあ、と思って。やっぱり、生まれ変わらんと、と思いなおして、腹を決めたけど。そのときまた2年ぐらい、叔母がまたくつついてきたのよ。この叔母とおると、ほんともう、金銭がだらしないもんだから、パラッパラッ使ってしまうし、わたしがいくら機織りして稼いでも、カネがなくなるし。それで、やっぱりもう、子どもといっしょにおっても喧嘩。で、子どもはわたしから引き離しとって、自分が育ててるみたいに、叔母が子守して。わたしは働かして。わたしはこの叔母とどうかして別にならないといけないと思ったときに、叔母が自分の子どもたちのいる大阪に行ったもんだから、そのときにはじめて子どもと2人の生活になって。したら、ほら、この子に対して、父親がいないちうこと

うな一つひとつのお墓に向いてこそ、手を合わせ、謝罪すべきではないでしょうか。そして、追悼式を開催するにあたって、隠れ潜み、顔を上げるのでできない多くのハンセン孤児が、胸を張って参列できるような手立てこそが講じられるべきではないでしょうか。きょう、わたしは、数知れないハンセン孤児を代表し、わたしたちがいまだに抱える被害、そして、とくに、別れを告げることのかなわなかった父への思いを込めて、ここに立たせていただきました。この追悼式が名前だけのものにとどまらず、真に、犠牲になった方々を追悼し、差別を解消する力をもつこととなることを強く願って、わたしの追悼の言葉とします。（拍手）

* * * * *

晴海さんの「追悼の言葉」に拍手がわき起こったことについての補足。<「ハンセン病問題の全面解決を目指して『共に歩む会』鹿屋」の）松下〔徳二〕さんが「共に歩む会」の会報（あれ）にね、「普通の式典ではありえない拍手が起こった」ちって「書いたの」。それを読んだとき、ああ、[最初に拍手してみんなの拍手を誘ったのは]福岡先生だなと思った。）

で、わたしがこれからは頑張らなくちゃいけないし。子どもに悲しくはさせたくないしね。だから、昼のあいだ託児所に預けて。そこには、この子どもの父方のオバが行ったし、また、そっちの子どもたちが連れていってくれたりしよったから、昼のうち、一生懸命織って。子どもが帰ったときには、バッタリ仕事もやめて。そして、夜はいっしょにこの子と団欒（あれ）して。そしたら、2人だから無駄遣いもなくなったし。わたしは小さいときに他人（ひと）からおカネを借りることだけは、ぜったい嫌な気持ちがあったから、いくら貧乏しても、そういう生活したくないちう思いで、したけど。

そうしてしながら、じいさんが、紬業（つむぎぎょう）しとって。これがまた、おかしい。〔じいさんは〕他人（ひと）にいいもんだから、他人（ひと）にさせるときには、手数ね、一反いくらかあげてるわけ。でも、わたしには、そういうの、ぜんぜんなし。そういうあれで、「祖父（じぶん）のため、せんばいかん」「叔母のため、せんばいかん」っち、頭越しにね、身内を使って。傍目は、「じいさんがたくさんおカネくれるだろう」っち、田舎のひと言うけど、「まったく、それじゃない」ってわたしが言えば、こんどはもう、飲んできて、わたしを脅しにくるし。そういう痛い目にも何べんも遇いながら我慢して。「〔おまえは〕育てられた」ちって、恩着せられて、したけど、裁判がなって、はじめて〔弁護士の〕先生たちと出会ったとき、わたし、叔母にはっきり言ったの。「わたしはね、〔あなたに〕育てられたんじゃないで、〔あなたに〕預けられたのよ。わたしを育てたのは、国かもしれないよ」って。「そこらへんは、はっきりわかって。いつまでも、自分が育てたとかそういう思いで、わたしを、しないでえ」ちって、わたしは、いっかい怒ったんだけど。だから、それを思うときに、自分が強く生きれなかったのがあるし、みんなに押さえられてばっかあったし。

このわたしが「押さえられとった」っち言ったら、みんな信じないけど、そういうあれだったもんだから、我慢、我慢してきたからね。だから、そこらへんが残念で、いつも〔弁護士の〕先生たちにね、「先生たちが10年、20年早く、してくださってれば、わたしの生き方がほんとに変わっとったかもしれない」ちって、わたしがそこでいつも泣きたくなるんだけど。自分がほんとに、幼児期にね、親が欲しかったころ、あのころにこういう助けがあって、話を聞いてくれるひとがおったらよかったなあと思う。そういう残念さで、ただ話すだけであって。それだからちって、身内を敵（ぎゃく）にして、裁判をわたしはしたくないという思いだから。だって、身内との闘いだもの、わたしの場合は。和光園に行ったら、「また、あっちへ行ってきたのか」ちって、じいさんに怒られる。もうもう、ほんとに、療養所の近くで生きる人間のつらさね。そういうのも、いっぱいわかって育ってきてるけど。療養所のなかでは楽しかったよ。

〔未婚の母になったいきさつですか？ 相手のひとは〕やっぱり、同村（どうそん）のひとで、いま和光園にいらっしゃる〇〇さんの弟さん。そういうあれで知っとったんだけど、あっちにも家庭があったために。〔既婚者だってことは〕あとでわかった……。まあ、どうでもいいやあという思いで、鹿児島に出て行って、いつか〔一緒に〕暮らしたけど、やっぱり、ややこしくなりだして。自分で、ああ、もう、これではいかんわあと思い直して、子どもを連れて、帰ってきた。わたし、機織る技術（あれ）があるんだから、またこれでやり直

せばいいわあと思って。〔熊本から奄美に来たときと、今度と〕2度、奈落の底に落ちた気持ちになりはしたよ、そのとき帰ってきて¹⁹。

子どもは父親の子どもとして認められてもあつたけど、むこうに家庭もあつたし、むこうが援助できるような状態じゃないし、むこうからの補助は受けなかった。機織りして、わたしが紬で儲けたほうが、いろんなことガチャガチャ言つて喧嘩になるよりはと思って。もう、亡くなつたけどね、その方もね。

人間がいいひとと結婚

〔子どもは〕男の子。もう43〔歳〕。でも、この子によって、わたし、助けられた面もあつて。ずっと田舎で生活してるときもね、傍目から見たらね……。バレエとかいろんな学校の〔行事に〕わたしも出て。だからね、この子の担任の先生たちが、「ハルミ、あんた、なんも考えることないんじゃないかあ?」「なんでえ?」「あんたを見とつたら、楽しいよねえ」ちうから、「いや、わたしも悩み、たくさんあるんですよ、先生」ちつたらね、「なんの悩みだ?」ちうから、「台風が来たら怖くなるしい。そのときは結婚したほうがいいよおと思うよお。でも、台風が過ぎ去っていったころは、忘れるけどねえ」ちつてね、「悩みはたくさんあるけどお」ちつたらね、「いや、あんた、それ見えないよねえ」ちうから、「バカだからよ」ちつて、わたし笑いよつたんだけど。

この子が5年生になるとき、少数に人数がなりだしたのね、学校がね。だから、名瀬に出てきて、育ててしたら、「母ちゃん、自分を高校だせる?」ちうから、「うん、高校まではぜつたい出してあげるよお」ちつて言つて。この子が、ちょうど高校にあがるころだつたンかな、いまの主人との出会いの話がきた。このひとも、家庭はあつたけれど、建設業に勤めながらすごく仕事人間で。ほら、家庭をお嫁さんに任してあつたけれど、すごく金銭方面で借金が増えて、会社のほうに〔取立ての〕電話がくるようになって、ぜんぜん〔自分の与り〕知らない借金を受けて頑張つてるうちゅうことを、うちの叔父なんか仕事関係で知つたもんだから。でもねえ、自分、またまた、こんなして苦勞するのもね、と思つたけど、人間がいいつちいうから、一緒になつて。主人（このひと）の入れる給料の半分は、もうほんとに〔自分の与り〕知らない借金〔の返済〕に、みな、なつてく。嫁さんは、生活保護を受けるちうことで、子ども

¹⁹ 2010年10月の補充の語り。〔2度、奈落の底に落ちた気持ちになつた、というのは〕1回はね、龍田寮から大島（こっち）に連れられて来たとき。もう、ほんとに地獄絵を見たような。2年生だつたけど、そう思いましたよ。何するの怖くて怖くて。父がそこにいるんだけど、何日かいなくなつたりしてね。ほら、自分の〔田舎の〕大柵のほうに帰つてるから。わたしを騙しだまし、わたしの様子を伺いながら、父は去つていつてる。もう、父つ子だから、「帰る」ちつたら、わたしにファーッとなられるから。父がそんなして消えていつたときの瞬間。そして〔もう1回は〕子どもを産んで、鹿児島から帰つてきたときも、一瞬、もう、ドスンと下に落とされたような不安な気持ちになつた。でも、自分を自分で見つめたときに、ああ、わたしはこんなして生きてるけど、自分で精神的な苦勞を抱えこむ人間だなあと思って。自分自身で抱え込んだ問題だから、もうこれは、現実と向き合つて生きるしかないと思つて。子どもとは、ちゃんとして生きてきたし。子どもは私生児だつたけど、〔むこうは〕認知〔だけは〕したけど。そのとき紬の状態がよくて、ひとりでも、子育てできてね、よかつたですよ。もう、楽しく。）

を引き取ったらしくて、主人（じぶん）は、その知らない借金のあるていど肝心な部分、多額の借金を引き受けて、支払い中だったけど、まあ、食べる分はわたしが機織りすればなるかあ、支払いはこのひとの収入（あれ）でなるかあと思って。

でも、それをする前にね、やっぱり、このひともおんなし大和村出身で、叔父たちが知ったついで、かわいそうちうことで、わたしに「一緒になれ、なれ」ちったし。うちの子どもにね、「どんなにするか？」言ったら、「母ちゃんがよければ、自分はいいよ」って言うしね。「ああ、そうかあ」と思ったンやけど。まあ、〔問題は〕ばあちゃん〔と母〕のことだねえと思ってね。同村だから、隠しとつても、どっかからは耳に入るし。「あのね、わたしは、こうこうして、和光園に母親がいるよ。それでよければね」ちったら、主人が「だれも病気はなりたくてなるんじゃないよお」って言うてくれた。「ああ、そうかあ」っち。でもね、人間、酒飲むひとたちはどうなるかわからないしねえと、わたしも思って。それを疑ったりもしたんだけど、そういうことがぜんぜんなくて、こうして過ごせてきて、何年かで主人の借金も返せて。また、晩酌程度はするけど、暴力ふるうひとでもないし。飲まなければ、ものもしゃべらない。飲んだら、ちょっとしゃべるけど。やっぱり、ひとの生活なんだから、いろんな問題があるけど、わたしがいくら喧嘩つかけても、自分は返答は返すけれど、母とかばあちゃんのこと、いっくら泥酔いしとつても触れたことない。だからね、「あんたの心、どんなにいいひとかね」って、わたしは冗談で主人に言うけど。わたしなんかだったら、ことばの端でポンとやっつてしまっただけ、ああ、このひとはほんとにいい人なんだあと、わたしは主人をね、その点で感謝してる。

また、主人がよかったために、ほら、母のことで和光園へ行くのも気にならなくなり、そうしてるうちには、いろんなことあって、母が病気でわたしが和光園に行つたら、主人が夕方迎えにきてくれたりとか、そういうあれでずっと助けてくれたし。だから、母親はうちの主人にね、「ごめんねえ」っち。「小さいとき、4歳までだったけど、この子の父ちゃんが甘えらして育てた。我が儘なところあると思うけど、よろしくね」ちっばっかり言いよつたらしいわ。もうそのとおりで、ずうっと、主人のおかげでこうして、わたしも、いま生活できてるけどね。また、この裁判が始まって、いろんな付き合いも、わたしが楽しみに出て行つとるんだからって、なんも言わない。だから、〔ハンセン病問題のことで奄美の退所者のひとたちと一緒に〕東京へ行くようになって2、3年したとき、〔東京にいる退所者の〕川邊嘉光（かわなべ・よしみつ）さんが「ハルミちゃん。ハルミちゃんの旦那さんは、よっぽどいいひとなんだろうなあ」と言うから、「どうしてですかあ？」ちったらね、「いやいや、こういう問題にね、2、3年、首つっこんだら、あとは、みんな引いていってるんだけど、あなただけは〔変わらず〕おんなしような気持ちで来てるなあ」ちつて言うからね、「いや、そんなことないよ」って。「でもね、わたしも奄美の退所者のひとたちとね、ずうっと療養所のなかで楽しくしてきたとこもあるし。このハンセン病が問題にならないうちでも、〔園の〕中のこと、いっぱい知つたし、中の付き合いがあったもんだからね、すごく楽しく生きてきてるし。このひとたちの問題が最終解決するまではお手伝いみたいにやりたいし、それができたらいと思う。大きなことはできないけどお」ちつて、わたし話したんだけど。

だから、ほら、MTさんたち〔退所者のひとたち〕とも、こういう付き合いで長年きてる。大きなことできないけど、「どこに集まれえ」ちえば、「はい」。「こっちは」「はい」。それぐらいしかできないですよ、わたしたちには。

祖母は平成2年に、母は平成8年に和光園で亡くなった

おばあちゃんはね、平成2年まで、けっこう89歳ぐらいまで生きとったんじゃないかな。叔父は、おばあちゃんが亡くなってから来た。おばあちゃん、すごい生命力のひとで、脳梗塞もなかったしね、〔息をひきとる直前まで〕意識があったもんだから、死ぬまで、〔ただ〕1人の男の子である叔父と会いたがってた。叔父は、この近くだったけど、やっぱり、嫁さんとかそこらへんに遠慮してか、〔死に目に間に合うかたちでは〕来なかった。来てから、大泣きしとったけど、それはすでに遅し、だったけどね。やっぱり、ほら、叔父は〔祖母のことを〕女の子のわたしたちに任せて、自分はもう知らんぷりして生きた。叔母はちょこちょこ来よったけどね。

〔母は〕平成8年、「らい予防法」廃止の年に亡くなりました。母は77歳、数え年で。

〔昭和32年に熊本から〕母が帰ってきたあのころはね、園の中も〔入所者が〕何百人ていらしたけど、和気藹々（わきあいあい）でね、すごく園が楽しかったと思います。〔わたしも学校が〕休みに入れば、定期的に〔母のところに行ってた〕。だからね、休み中に田舎の同級生と遊んだことない。して、ほら、隣〔の舎〕のばあちゃんたちでも、いろんな食べ物が来たら……。だって、お母さんのため〔園から配給で〕来るのは、お母さんはわたしに分けて食べらしてるわけだし、足りないときはお素麺ゆがいたりしたときもあるけど、おばあちゃんたちが、自分たちが食べきれないから、「すみさん、すみさん、子どもが来てるんだったら、あげて、あげて」ちって持ってきたりとか。

ばあちゃんたちがおるところが「曙寮」ちって、4人で一部屋で、〔それが〕4つあって。炊事場が両サイドにあって。トイレがここに4人分あって。長い部屋で。母がおるところは「桜寮」ちって、3人ずつの、3つ部屋で。炊事場がこっち、玄関がこっち、トイレこっちで。うちの母が元気だったときはね、人づきあいもあれだし、けっこうね、「若竹寮」のおにいちゃんたちの出入りも多くて、退所したFさんたちがいうように、「いや、ハルミちゃんのお母さんにお世話になったよなあ。おまえのおふくろだったけど、おれたちのおふくろでもあるんだよ」ちってね。あのころ、食べ物がなければ、うどん、そうめん持って行って、「ゆがけえ」「つくれえ」って言って、そうしながら食べてね。向かいには、どこが病気かっち思われるきれいなねえちゃんたちが、いっぱい入ってるわけでしょう。あんなきれいなひとたち、どこが病気なんだろうっち、そういう不思議な目で見よった。おにいちゃんたちの目的は、その彼女たちでもあるわけ。うちの母のそこ、中継場所よ。楽しくてね、ひとがいっぱい集まって。花札とかそんなのしてるの、わたしも見様見真似で覚えてもいったし、けっこう楽しい時期だったと思います。

でも、おカネの時代になったら、人間も変わってきたんじゃないですか、園の中の間人まで。だんだん、社会に自由に出られるようになったし、そして、園の中から外に働きに出とったひと、いっぱいいらっしゃるわけですがね、男のひとたちは。そうして、いろいろ情勢が変わりだして、カネ、カネの社会に

なっていったときに、やっぱり、療養所のなか自体も変わったような気がする。5、6年前かね、TNさんの奥さんがね、「ハルミちゃん、むかしがよかったねえ」ちってから、「どうしてえ？」ってわたしが言ったらね、「いやあ、いまはね、カネの時代になったら、隣におっても、薄情(あれ)よお」ちって、[園の]中における本人が言うから、ああ、傍(はた)から見てもそう見えるのに、やっぱり、そうなんだろうと思って。むかしはね、やっぱり、食べ物でも分け合うし。[退所者の]MTさんが言うとおりに、「社会が食べるのがない[時代でも]、療養所の中はけっこう食べ物があって、よかったかもしれない」。

母娘で一緒に療養所にいるきつさ

してね、うちの母がいちばん嫌だったのは、母娘(おやこ)で一緒に療養所における[こと]。うちのばあちゃんが明治生まれでね、凜(りん)としてね、[気が]強かったの。うちの母はね、また、気が弱いひとなのよね。言われたら泣く。けっきょく、怒られるのはわたしのせいで怒られる。夏休みが終わる前になって、「もう学校が始まるから帰れえ」ちって、送られて。わたしも名瀬まで下りてくるんだけど、なにしろ、むなしくなるとね、また、折り返して、おんなし来た道を、まあ登って、ポツンと寮(いえ)の前に立ったら、母はもう怒るわけにいかないで、「もう、あした帰れよ」。ばあちゃんが来て、ガーッと、「もう学校が始まるのに、まだ帰してないのオ!」「ほらほら、言うこと聞かんと、自分がばあちゃんに怒られるよお」ちって、母はもう、いつも泣き。そして、田舎でもね、[わたしが]叔母の言うこと聞いてちゃんとせんと、また叔母は甘えて、ばあちゃんに報告に来るからよ。だからね、わたしのせいでね、母が怒られる。「みんなが言うこと聞いて、仲良くしてせんば、自分が困るよお」ちってね。

で、一回ね、早いうちに療養所の統合問題が出たことがあったんですよ。[母が]「星塚[敬愛園]か[菊池]恵楓園かっちなつたときに、自分は恵楓園に行くからね」ちったから、「いいよお」って、わたし言いよったの。[その統合の話がでたのは]「らい予防法」が廃止にならないうち。そないして、希望[を取るアンケート]なんかがあったときに、「自分はもう、行けっちはいば、恵楓園に行く。ばあちゃんと一緒におるのもきつい」って言いよった。いっつまででも、ばあちゃんは子どもと思って、「スミエー!」ちって、大きな声で、ガンと言いくるし、もうそれで、うちの母はビクビクビクビクしとった。

だから、「おんなし療養所に親子がおるのも大変よお」ちって言いよった。わたしにも、「叔母の言うことを聞いて、[小言を]言われんようにせんば」ちって言いよったけど。どっこい、わたしも中学校ごろになったら、あるていど頭もまわってくるから、そういうわけにはいかないし。とにかくもう、喧嘩は絶えなかった。

明治生まれの凜とした祖母

[祖母は、たまには大和村に帰ってきたか、ですって?]ばあちゃんは、平気、平気のさっさ。それがね、来るとか来ないとかの連絡もなしに[突然やって来た]。園の入所者(ひと)がね、何年ごろか、車の免許が取れたのよ。取れて、自分たちで車乗ってしだしたら、そのひとを頼んで、乗ってね、堂々と来てね。自分の息子のね、叔父の家には行かないの。わたしのとこに来るもんだ

から、もう、こっちが仰天してしまって。来たひとを「帰れ」と言うわけにも
いかないし。もう仕方ないなあと思えば、夜になったら、叔父夫婦は隠れてば
あちゃんに会いに来るわけでしょ。ああいうと見とったらね、なんのあれか
なあと思って見よったけど。

ばあちゃんは、ほら、海は好きだし、堂々と行くわけでしょう。田舎に帰っ
てきたら、珊瑚礁が出て、潮干狩りができるのよ。そこへ行ったり、墓参りと
かも堂々と、あの格好で歩くもんだから、もう、こちらはヒヤヒヤ。だけど、
言うわけにはいかない。たら、ばあちゃんが来てることを、どのひとが掛ける
か知らないけど、[誰かが] おじいさんの家に電話する。そしたら、「ばあちゃん
が来てるらしいけど、早よ、園に帰らせ」とか言うし。「そっちが言えよ」
って、わたしは言いよったんだけど。また、[ばあちゃんに] それを言ったら、
けっきょく、ほら、女つくって、夫婦別れした仲だから、「偉そうに」ちっ
いことよ。「オゼラヌチウンキヤヌ、ワキヤバキラトウ」ちって、ばあちゃん
にしたら、鼻笑いするわけ、祖父を。[自分自身が] たいしたことないくせに、
自分を嫌って、ちってね。ばあちゃんとしたら、そんな返答するもんだから、
もう、どっちに立っても、こっちから言われ、こっちから言われ、ほんと、立
つ瀬ないし。また、じいさんの嫁さんも、公然とね、「園におるひとたちは、
遊んで食べて、長生きして」ちって、そういうことばも勝手に吐くし。もう嫌
な思いもしてるけど、それをまともにばあちゃんたちに言えるわけがないです
がね。「嫌って、嫌って」ちって怒られるし²⁰。

²⁰ 2010年10月の補充の語りでも、晴海さんはこう語った。若干重複するが、記載し
ておく。〈ほら、じいさんは名瀬におって、もう、ばあちゃんが星塚〔敬愛園〕に行
った時点から、女がおったから。ばあちゃんがハンセンにならないうちから〔女が〕
おったかもしれないっば、ばあちゃんがよく喧嘩しとったちう話をするから。だ
から、いまでも、うちの叔父のところ、じいさんの位牌（せんぞ）があるんだけど、
ばあちゃんの方は叔母が拝んでるの。だから、おんな子どもだけど、もうこのふた
りがね、喧嘩してむつかしいもんだから、2つ一緒になせないのよ。で、ばあちゃん
も、元気なうちはすごく働き手だったから、田舎に大きな家つくって。そんなにして
ばあちゃんが難儀してつくった家を、終戦前に〔ばあちゃんが本土に〕引き揚げて、
〔その留守に〕じいさんがその家をよその集落（ぶらく）のひとに売ったちって、
また喧嘩になったり。ばあちゃんとじいさんの仲は、一生死ぬまで悪かった。ていう
よりかも、じいさんたちも、商売上、ばあちゃんと母とはもう〔この病気だって〕嫌
うもんだからね。だって、ばあちゃんと母にたいして文句言うときは、わたしに言っ
てくるから。「自分が〔直接〕言えればいいんじゃない？」ちって、わたしは言うん
だけど。自分たちはまた、いいかっこして、言いきらんで。で、そうして言われたらね、
うちのばあちゃんね、「ハケケケ」ちってね。「オゼラヌチウンキヤヌ、ワキヤバ、
キラトウ」ちって。ほら、ばあちゃんも明治女だから〔気が〕強いよ。自分た
ちもたいしたことないくせに、偉そうにするなあちね。島ユムタで「オゼラヌチ
ウンキヤヌ、ワキヤバ、キリヤテ」ちって。「ククククッ」ち、ばあちゃんがかえっ
て、じいさんをおかしく見よったもん。それだけ、うちのばあちゃんは強いっちゃ。
ハンセンの偏見とか差別（あれ）があっても、田舎に〔帰って〕来て、堂々と歩くか
ら。もう、わたしたちがビクビクビクビク、小さくなりよったもん。ほんとに、〔病
気のことでなにか〕言う者があれば、「ククククッ」ちって、怒りよった。あの時代
だよ。昭和40年代で。でも、ひとつだけ、そう言いながら……。うちの叔母は、自
分の子どもとの生活で、大阪に行とったけど、そしたら、田舎にはわたしとわたし

〔ばあちゃんの後遺症？ 敬愛園の玉城〕しげさんみたい。〔指もなくなってる。〕だから、「クルおばさんのおてて、どうなった？」ちって、しげおばさんが聞いたからね、「おばあちゃんといっしょよ」ちったら、「ウソ、ウソ、ウソ」ちったよ。「いやあ、鹿屋にいたときは、体格はいいし、指は細くてね、手もきれいかったのに」って。〔和光〕園に入って、けつきよく、ほら、園の作業（あれ）で難儀してるから。そして、園でもじっとしてなくてね、山へあがって、筍（たけのこ）採りに行ったり、畑つくって、西瓜つくったりいろいろしてね、動くひとだから、もう、知覚（かんじ）がないうちに、みんな傷つけていって。あとは、みんな、ここ、ここ、やられて、切られて。で、こんだ、きれいかった顔も、あとはたるんできてね、このへんに絆創膏あてて、ピッチ〔皴を〕引き上げてみたり（笑い）。変な格好になったよ、先生。

足は大丈夫。背はスラッ。死ぬまで、腰も曲がりもないし。そんなひと、ばあちゃんは。強かったよ。だから、平気。「らい予防法」とかそんな関係ない。おかまいなし。こっちがヒヤヒヤ。でも、いま考えたらね、そういうばあちゃんの生き方がほんとうだけどね。それをわたしたちが嫌と思ったのが、恥ずかしいところもありますけどね。ばあちゃんは、おてて振って平気で歩くし。〔わたしたちは、そんなばあちゃんの振る舞いに〕脅かされる一方。そして、うちの子が小学校入学した次の日に、またまた、なんも連絡しないで来るもんだから。入学した次の日といったら、先生の奥さんたちがね、同年輩の子どもがいるもんだから、うちの子どもにお祝いとか持ってくる時、ちょうど出くわして。そのあと、そのひとたちが見る目線（あれ）が……。やっぱり、湯呑も掴まないし、そういう態度（あれ）を見たときに、嫌だなあと。ばあちゃんの姿を見たら、誰も〔湯呑を〕掴まないでしょう。

母の死を看取る

母は、平成元年に、最初の脳梗塞の発作が起こったんです。夜の3時ごろに和光園から電話があつて。ちょうど主人は飲んで寝とったもんだから、車が出せなくて。「あんた、飲んでるから、いいよ。わたし、タクシーで走るからねえ」ちって、走ったけど。そのときは、すぐ意識返して。「大丈夫だから連絡せんでいい、というのに、連絡したの？」ちって、母もね、病棟の婦長さんを怒とったけど。「そんな怒るんじゃないで。婦長さん、心配してじゃがね」ちったら、「夜だから、心配するから、いい、ちうのに」ちって。そんなしていたら、主人もあわててバイクで走ってきて、ふたりで夜の道を帰っていったりしたけど。

の子どもとおるわけでしょ。母子家庭で。40～50メートル離れた上のほうに、自分の息子の家庭があるけど、田舎に来ててもその家には行きはしなかった。そこがまた、おかしいなとわたしは思うのよ。わたしは孫だけど、むこうは子どもなのに、やっぱり嫁に遠慮してかなにしてか。あんなに元気があるわりに、自分の子どもの家には行かないで、わたしの家に来るちうのも……。だから、わたしのばあちゃん〔だけど〕、叔父の子どもたちも、わたしの子どものばあちゃんとか考えないの。わたしのイトコがよ。自分たちのばあちゃんだけど、うちの子どものばあちゃんっち感覚になってるの。だから、あれだけ〔気が〕強かったのに、あすこらへんは、ちょっとやっぱり遠慮しとったのかなあと思ひよったよ。年に何回かね、島に来てね、墓参りしたりしよったからね。)

そのあと、何回か発作を繰り返して、県立病院に運ばれて。「お母さんが県病院に行ったので、行ってください」ちって電話をもらう。そうしたらもう、わたしが付かなければならないわけね。で、わたしも、傍目を気にして。やっぱり、こんなひとが入院しとったら、周囲がどうかなあとと思ったけど、ICUに入れられてるときも、そのときの〔園の〕中の病棟の婦長さんがとってもいい方で、そしてまた、〔担当の〕先生がとってもいいひとでね、やっぱり、わたしが行ってるから、なにか気まずくなったらいけないからと思っただけ、ちょっと仕事のあいまをみて、白衣姿で飛び込んでいらっしやるもんだから、県病院の看護婦さんたちがワッと引き締まったかんじでね、あれしたから、対応はよかったんですよ。して、わたしにね、「娘さん、なにか困ったことないか？ 大丈夫か？」って聞くから、「いや、先生、いまのところ、なんもありませんよ。ありがとうございます」ちって、わたし言ったんだけど。

そして、こういうふうは何回かして、〔県病院の〕部長先生も、鹿児島から来てるいい先生でね、とくに気にして、よくしてくださって。また、園に帰ってからも、たびたび診察に来られとって、「もう一回〔県病院に〕連れて行って、MRI 撮りたいな」とかおっしゃったらしい。だけど、その先生、いい先生だけに、アメリカに留学された。して、後任の先生もよかったけど、やっぱり、外での入院生活ちうのは、母にとっては苦痛なもんで。意識がなければそれでいいけどね。うちの叔母もそのとき帰ってきてくれて、いっしょに付き添って。昼はわたしが付いて。夜は叔母が〔病室に〕泊まってくれて。叔母に話してる話を聞けばね、〔母は〕自分は和光園から菊池恵楓園に入院した気持ちになってるらしくて、「熊本は初めてかあ？ 自分が入院したから、あんたも菊池に来られてよかったね」とか言いだしたらしい。そういう状態を見たときに、もう、わたしがね、園で看護（あれ）されたほうがいいと思って、園長先生に、「先生。先生たちが、発作が起こるたびに、県病院に連れてあれしてくださいのはありがたいけれど、母の状態を見たら、和光園のほうが幸せと思う」って、先生にお願いしたら、「娘さんが言うように、そうしようねえ」ちってね。ほら、園内の看護婦さんたちにたいしては、目がきかんでも、声を聞いてわかるのね。

前の年に、R 子さんと M 子さんのお父さんが先に亡くなったもんだから、すごく気落ちしてね。「自分のことをちゃんと面倒みてくれてから死ぬっち言いよったのに、先い逝（い）って。ウソばかり言って」ちってね。あの、おなし同窓生だからね、「スミエ、心配するなよ。あんたのことまでちゃんとしてから、あとで自分は逝（い）く。あんたが死ぬときは、自分がちゃんと〔追悼の〕言葉も述べるし」っち言いよったのが、先い逝（い）ったもんだから、それでガックリきたらしくて。もう、自分も生きる気力失ってね。あとは泣きだして。わたしを和光園にいちばん最後まで通わずちうこと、すごく気にしてね。「自分が早く死ねば、あんたも来んでいいのに……」。「そんなことはどうでもいいよ。いまは旦那も協力してくれてるし、わたしに余裕もできてるから、そんなこと言わんで、長生きしていい」ってわたしは言うのに、もう、本人が生きる気力を失ってるもんだから、ご飯は受け付けない。そんな状態が続きだしたから、今回はヤバイねえとわたしも思っただけ。だから、園長先生たちは「長期戦になるかしらん。あんたが大変だから、疲れんように、連絡するとき〔だけ〕来ていいよ」っち言うけど、「いいよ、先生。暇があるかぎり、わたしも

付いてあげなければ。親子でありながら、一緒に暮らせなかった親子だから、ここはしてあげないと、とわたしも思ってますう」ちってわたし言った。でも、わたしが付いとっても、なんにもすることないの。看護室からちゃんと見えるもんだから、わたしが動くたびに、婦長さんかだれかが飛んできて、自分たちがしてくれるのね。

そして、また発作が繰り返したから、こんどは意識ないのかと思うとって。わたし、ずうっと毎日見とったら、うちの母がね、わたしが動くたびに、顔が動く。「あれっ！ かあちゃん、わかる？」ちったら、喉（ここ）に管（あれ）を入れてるから、ことばが出せないだけであって、ウンちする。また婦長さんが飛んできて、「なんて言ってる？」「わかるちうよ」ちったら、「スミ姉（ねえ）、わかるのお？」ちったら、ウンて、こないするから、「あら、意識、戻ってたんだあ」って、婦長さんもびっくりして。あの、「もう、わからないもんだらう」っち、みんなが言ってるの、みんな聞いとった（笑い）。そして、ほら、シモ〔の世話をされるの〕も嫌がってね。意識があるから。でも、ご飯を入れないからね。流動物を入れても、それは上から戻して。2ヵ月点滴〔だけ〕で、便も出ないでね。もう、きれいにあれして、最期までしたんだけど。

そないして、ずうっと見とったけど、あとはもう尿の出が悪くなりだしたときに、やっぱり危険を感じて。その〔平成8年の〕6月28日の朝、わたし、「婦長さん、いっかい、家に帰ってシャワーでもしてきていいかね？」っち言うたら、「10分で行ってこれる？」っち言うから、「婦長さん、タクシーで行っても15分ぐらいかかるし、やっぱり、往復2時間はみてないと〔戻って〕来れないんじゃないか」ちったら、「うーん」ち、首を振るのよね。その前の前の日に、担当の先生がね、「自分は、東京に、ちょっと厚労省の会議があるから、きょうの夕方の飛行機で行って、あさっての夕方には帰ってくるけれど、いざというときの処置（あれ）は、園長先生にお願いしてるからね、娘さん」ちって言ったから、ああ、やっぱり、危険だなと、わたしも感じとったけど。もう、あんまり暑くてね、「シャワーでもしに帰りたい」っち言ったら、婦長さんがちょっと許さない感じで、首を振らないから、ああ、きょうは動いていけないんだらうと思って。「だったら、婦長さん、いい」ちって、わたし、おったんだけど。そうしたら、その日の夕方かな、担当の医者が東京から帰ってきて、先生も官舎（いえ）に帰らないうちにすぐ病棟にいらして、「気管の入れ換えせにゃならんけど、2、3日してから、しようねえ」ちってね。先生が官舎（いえ）にあがって、まだ着替えもしないうちに、一瞬にして〔母の〕容態（ようす）が変わった。だから、自分が信頼しとった担当の先生を待とったみたいになくなっていった。

そうしたら、亡くなったあとに、また、叔父が飛んできてね。来たのはいいけど、「あした葬式するように言え」と言うから、「そんなこと、わたしの口から言えないから、自分で言えば」って、わたし怒ってね。したら、そない言ったけど、福祉〔室〕の室長さんが、「そんなことはできません。〔火葬までには〕24時間は置いてください」っち。もう、葬式の段階から、そういうことでね。だからね、わたしは「かあちゃんもふるさとに帰っても、親戚と付き合いができたひとじゃないし、生涯、療養所で生活したひとだから、葬式はね、療養所のひとみんなであれしてもらって、〔そのうえで〕わたしは連れて帰りたいから、忙しくて来なければ来なくていいよ」って言ったけど。来てはくれたん

だけど、そういう「葬式は早めにせ」とかなんとか言われればね、嫌な気持ちしたんだけど。

そして、〔入所者の〕IMさんが、おばあちゃんとおんなし大和村のひとで、わたしがちいさいときから〔和光園に〕来てるのを見てるもんだから、カトリック信者さんでもあるし、朝の早い時間に、教会に行く前にいらしてね、わたしをじいっと見とってね、「ハルミ、お疲れさんねえ。これで、和光園とお別れだねえ。長いこと頑張ったねえ」っち言われたときにね、もう、ほんと、一抹のさびしさを感じた。だって、ある時期には、こんな親、早よ死んでしまったほうが、わたしは楽なのにとあって、自分で葛藤したときがなんべんもあったし。だって、「両親は？」って他人（ひと）に聞かれるときみたいに辛いのがなかったんですよ。「父は死んだ」ってはっきり言えるけど、生きてる母を「死んだ」とは絶対に言えなかったから、そのときに、言葉が出せないで止まるときが多かったし。まあ、ある程度、自分の思春期には、この親は早よ死んでくれたほうがいいのにね、と思ったこともあるけど。主人と結婚してからは、いっさいね、そういう思いは一度もなかった。もう、いい世の中だから、あわてて死なないでいいよ、長生きしてくれってね、そう思ったし。

あの「らい予防法」が廃止になったときも、ちょうど、和光園の母ちゃんの部屋にいっしょにいたのよ。〔母は〕目が不自由だし、ラジオだけは付けっぱなし。もう一日中でも聞いているひとだから、「かあちゃん。菅直人厚生大臣がね、らい予防法、解いて、いい世の中になるがぁ」とわたしが言ったら、〔言い〕終わらんうちにね、「ガシュンクトウユンバン、クニヌシュンクトウジャガ、ワカリユンニヤ」ちって、怒ったから、「あぁ、そうね」ちって、わたしも思っと思ったけど。この裁判が始まって、いろいろなったときに、もう、嫌だなあって。「ハンセン、ハンセン」っち言って、また、寝た子を起こさないでくれ、と思っと思ったけど、まあ、自分がかかわったときに、母があのとときに「そんなこと言っても、国のすることだから、わかるもんね」と言ったあの言葉には、生涯、国を信じてなかったのかなあと思う気持ちも出てきたし。まあ、〔出るところに〕出て、話すことは話したほうがいいかなと、そういう思いになったのも、事実です。最初は嫌だったけどね²¹。

遺族提訴の原告に

〔裁判の話は、どのへんで伝わってきたか、ですって？ 和光園で〕原告団を集めるときに〔中心的役割を果たした〕山本栄良（えいりょう）さんはね、うちの母と友達だったのよ。栄良さんは、和光園の〔入所者〕自治会長したときに、

²¹ 2011年11月の補充の語り。〈ものを知ったときからハンセン病にかかわって、〔それも〕母が死んだとき〔やっど〕終わるかと思ったのが、まだ、延々と続いている。だからね、〔これはわたしが〕死ぬまで終わらないか。——国宗先生が、いつも、「ハルミさんはね、休みのたんびにお母さんのところに来てね、できただけはいいのよ、いいのよ」ちうけど、「いやぁ、先生、それはね、ひとから見たら、いいのよと思うけれど、わたしには、ほんとに、母が恋しくて通ったのか。ただただ、自分の田舎の生活苦から抜け出したいために、わたしは通ったような気がする。わたしがほんとに母を好きだったとは、わたし、思えない」って。1枚の布団にね、〔からだを〕直立にして、わたしは眠るもんだから、いっしょにくっつきたくても、母はくっつけないし、遠慮して寝とったことも、わたしは覚えてるし。〉

もう、ほんとうに満場一致でなったような自治会長だったの。だから、「自分が集めれば、裁判にもいっぱい参加してくれるだろうちう自惚れも自分はあった」と。「それが、回ってみて、みんなが奥へ引いていったところもあったあ」っち、栄良さんが言ったことあったけど。そんな状態だったらしい。声かけたらみんな理解できるかなと思ったけど、裁判っちなったら、みんな怖がって奥引いたっち。〔それでも〕一般舎よりか不自由棟のひとが協力したらしい。〔目が見えないひととか義足のひとたちが〕ものわかりがよくて。そんなだったらしくて、「自分も思い違ひした」っち、栄良さんおっしゃってたけどね。

〔わたしは〕遺族の原告団（あれ）に入りましたよ。〔わたしは、遺族の立場で〕赤塚〔興一〕さんたちが出とることを知ったけど、大和村（いなか）〔出身〕のひとで、いまも療養所にいらっしゃる方から、「スミエの補償金（おかね）もあれされるが。話なんか聞きにこんね」っち、電話があったの。「ああ、そうね。だったらね、栄良さんが母の友達だったし、栄良さんのとこに電話かけて聞くわ」ちって、栄良さんに電話したら、栄良さんが、イの一番に、「おおう、おまえのこと忘れとったあ！ ああ、失敗した。赤塚さんを出す前にね、おまえがいたんだよ、そういえば」ちってね。「弁護士が来るとき、電話するから、おいでねえ」ちって、栄良さんから声かかったのが最初。それがね、えっと、〔熊本地裁の〕判決が出て、そうして、遺族のね、〔基本〕合意書が〔交わされたのが、2002年〕1月28日か²²。その前にも、電話はもろうとったけど、わたしは行かなかったの。はっきりしたことが出ないまでは、ちょっと置いとこうち〔思っ〕。その後、「弁護士も来るから、話を聞きにおいで」っち、栄良さんからまた電話があった。そのときにはじめて行って、話を聞いてきた。あのときは、奄美和光園担当の国宗〔直子〕先生とか〔弁護士の先生たちが〕いっぱいいらしとったけどね。そのころは、いっぱい話を聞きに来とったですよ。〔遺族が〕あちこちから。

なかには、〔ハンセン病療養所で死亡した〕お父さんの子どもだけど、認知されてないために、戸籍上ダメなひとまでてきたけどね。その子ね、いま43くらいになる子だけど、その男の子が残念そうに、「あんたたちはよかったね」っち言ったら、R子ちゃんが「あたりまえじゃが。ウソも隠しもなくしたひとたちあ、まともに通るのよ」っち言ったのよ。「だって、うちのお父さんなんかは、偽名も使わんで、まる裸で、ハンセン病ですちって生きてきてね。そんなにして、ちゃんと籍入れてしてあるからよ」ちって言って。でも、あの当時ね、自分の子どもをハンセン病の子どもになしたくないちう親の思いが、裏目に出たひともあるわけ。して、〔戸籍上〕きょうだいの子どものなしたひとたちも、〔補償金の相続が〕ぜんぜんないわけでしょう。そのおカネは〔亡く

²² 2002（平成14）年1月28日に「ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会会長 曾我野一美」と「厚生労働大臣 坂口力」とのあいだで交わされた「基本合意書」には、「ハンセン病患者であった者が提訴時に死亡している場合の当該死亡者の相続人である原告及び入所歴のないハンセン病患者・元患者の原告が提訴した訴訟に関し、次のとおり、司法上の解決（裁判上の和解）についての基本事項を合意した」とある。そして、「一時金の支払」の条件として「相続人からの請求について、当該原告が相続人であること及びその相続分については、証拠に基づき、裁判所が認定する。／原告は、相続を原因とする不動産の所有権移転登記手続に要する程度の資料を証拠として提出する」とされた。

なった入所者の] きょうだいには行くけど、子どもに來ないっていう矛盾したことがありますよね。自分たちの子どもになすより、妹の子どもになしとったほうが、ちゅう。でもね、「そういうことをしないで、親子〔で〕ハンセンの家族として生きたひとには、ちゃんとしたことがなかったんじゃない」ちって、あの R 子が言ったから、笑ったんだけどね。うちのばあちゃんも、うちの両親も、偽名を使ってないもの。本名で通して生きてきてる。

遺族仲間との出会いから「れんげ草の会」へ

〔宮里良子さんや K 子さんとの出会いですか?〕合意書ができて、わたしたちがね、遺族の裁判に参加するようになって、手続きを始めて。そのときに、何回か「熊本に出ておいで」ちう声がかかったのね。父はもう〔昭和〕31年に亡くなっているから、20年の除斥期間(あれ)で切られて〔補償金の相続の対象にはならなかったけど〕、母のは対象になったの。そのときに、〔弁護士の〕先生たちのほうからね、「意見陳述をちょっとしてくれ」ちう話があつて。そんなだいそれたこと、わたし、できることないし、また、ひとにいろんなことを話したこともないけど、国宗先生が、あのやさしい口調(ことば)でね、夜電話かかってきて。それ、ついつい乗せられていって。「先生、わたし、やれませぬ」ちい言えばね、「やれます」。そういうふうに、どんどん叩き込まれていって、わたしのオッケー取ったら、2日後に久保井先生が〔福岡から〕サッサと奄美(ここ)にやってきました。久保井先生とも初対面だから、「先生、わたし、なに話せばいいんですか? わたしはもう、愚痴みたいにしかならない」ちい言ったけど、いろいろふたりで一日越し話していたら、あのころ、まだパソコンじゃなくて、先生が、カレンダーの大きな紙の裏(あれ)にちょこちょこ書いてる。「先生、わたしの話、そんなこととして、わかるの? わかるの?」ちって、わたし、先生に何べんも言いながら。「こんな話聞いてて、先生、眠くない?」ちって、わたしが先生に冗談で言ったりとかして。

まず最初に、「先生、わたしは泣きませんよ。泣いたら語れなくなるよお」って、わたし言ってね。「わたしはね、もう2回ぐらい大泣きしてる。両親と〔昭和〕25年に離れたときと、奄美大島に突き放されてからのね。もう、それから後はね、ほんとにけっしてもう涙は流すまいと思って、もう我慢我慢ガマンガマン。ほんとに、叔母に怒られても、大泣きすることなく、そうした我慢の生活ばかりしてきてるからね、人前ではけっして泣きたくない」ちい。「泣いたら語れなくなるう」ちい。先生に言われたね、「それだけ辛かったひとは、やっぱり、そういうふうになるんだらうなど、わたしも思うときあるんですよ」って。

熊本〔の〕裁判〔所〕で〔わたしの〕意見陳述が終わったあとに、記者会見があつたの。そのときにね、ちょうど真っ正面に、宮里さんがね、きれいな黒い帽子をかぶって、ブルーの T シャツの長袖を着て座ってね。黒いスカートで。とつてもきれいな姿で座ってるもんだから、まあ、このひとは誰なんだろうか、弁護士なんだろうかあと思ってるうちに、記者会見が終わって。あとで K さんと宮里さんと〔わたしの〕、3人が紹介されて出会う。出会ったときから、ポンポンポン話が出てくるし。これももう、不思議な関係ですねえ。いやあ、宮里さんを見たとき、ハンセン病のひとの子どもとも思わなかったし。不思議なひとだね、このひとは、と思って見てて。K さんは、あのとおり、

最初からボンボンボンやりだして、なんというひとだろうと、やっぱり一時（いちじ）思ったけど。まあ、おたがい気性が激しいのも、この問題にかかわった影響（あれ）かあと考えていたけど。そういう出会いから、2 ヶ月に1 回ずつ、遺族の裁判のあれがあるたんびに出会うようになってきて。

そして、みんなでベチャベチャベチャベチャしゃべるうちに、つぎの年の何月かな、国宗先生のほうからね、「遺族の会でもつくろうかあ」って。「会の名前は どうする？」って。「〔国宗〕先生のところは『菜の花法律事務所』。〔熊本の別の先生は〕『コスモス法律事務所』。みんな、花の名前ばかり。じゃ、花の名前にする？」ちって。K 子さんがわたしに「なんにしようか？ なんにしようか？」って言うから、「花は、いっぱいきれいな花あるよねえ。でも、不思議〔なこと〕にね、わたしは、れんげ草を知ってるんだけど、奄美にれんげ草の花がないの。〔熊本の龍田寮のあったあたりは〕いまは住宅地にぜんぶなってるけど、あのときは家なんかなくて、田園風景だったの。ちょっと上がったところに、龍田寮があったからね。そのときの風景が忘れなくて、なんで、島にれんげはないんだろうかあと考えて育ってきた」ちったら、国宗先生が「それがいい！」ちって。そうして「〔れんげ草の会〕を2003年3月25日に」立ち上げていって。3人会うたんびに、ガチャガチャガチャガチャで、ほんとに言い合いみたいになるけど、やっぱり、原点が1つ。他人（ひと）にたいしては、親のこと話すのにちょっと引くけど。〔おたがい〕親が病気だったちうその結びつきは大きいし。なに言ってもやっていけるっち信頼感（あれ）で、したときに、ほら、R子ちゃんたち入れて何名か集まってしたけど、この子たちは「自分たちはそういう苦労がないから」ちって、ちょっと遠慮ぎみになったけどね。こうして、れんげ草〔の会〕の出会い、3人〔で始まったの〕。

そして、〔だんだん〕1人2人と増えていった。原田信子さんは、東京の裁判のほうに早く出とったらしくて、いろいろなひとを知とってね。熊本にも来るときに、熊本の退所者のひとたちと行動しとったもんだから、あれ、このひと、どういう関係（あれ）なんだろうかあと、わたし思って、してるうちに、遺族とわかって。

したら、1年後ぐらいかな、〔多磨全生園からの退所者の〕HAさんが「大阪にこういうひとがいるんだけど」ちって、中村秀子さんが、こんど、〔れんげ草の会に〕出ていらっしやるようになり。そういう地道な出会いがあつてね、あれしたんだけど。まあ、貴重な5人ですわ、ほんとの遺族として。赤塚〔興一〕さんも遺族だけど、この女性の5人はね。

熊本地裁での意見陳述と検証会議での証言と

〔最初に熊本地裁で法廷に立ったときは緊張したか、ですって？〕緊張しましたよ。だって、帰ってきてから、ドオーツと疲れて、蕁麻疹（じんましん）がでたもの。それがね、あれは〔わずか〕何日間のあいだからやれたけど、あれが2 ヶ月前から〔準備していたら、かえって〕わたしはやりきれなかったかもしれない。〔いろいろ〕考えだすから。わたしは、その次の〔公判の〕日のおきに入れる国宗先生の計画だったけど、福岡〔のひと〕がキャンセルになったらしい。〔だから〕2月（ふたつき）繰り上がった。国宗先生も慌ててね、誰にしようかって。わたしを説得して、「〔あなたなら〕やれます、やれます」で押しつけて。あのやさしい声で言われたらね、国宗マジックに引っ掛かって。そ

んなして、引き受けたら、もう2日後に、久保井先生が飛んできた。久保井先生と打ち合わせをして、久保井先生が帰った2日後に、わたしはもう〔熊本に〕のぼって。そして、予行演習ちって、コスモス法律事務所の会議室でね、〔弁護士〕大先生たちが座る前で、「いっかい練習してください」ちってやられたとき、徳田〔靖之〕先生はいつも会ってるから、やさしかっち思っったけど。八尋（やひろ）〔光秀〕先生がね、あのガンとした顔で、最初、怖かったの、わたし。でも、終わったあとに、「ああ、これでいいですよ」って。「時間気にしないで、ゆっくりやってください。そしてね、何回かは裁判長の顔を見てください」って、その注意をしたとき、あっ、いい先生だって思ったのよ。そのとき、一瞬ほぐれたけど。もう、そこまでやらずかと思って、わたし怖かったの、最初は。してね、あの、法廷（そこ）の席に座ったときも、いやあ、どうしようか、どうしようか。久保井先生がいっしょに座ってくれたものの、まあ、なにも考えずにやったけど、後でドオーツと疲れました。

〔法廷で意見陳述したときも、久保井先生と打ち合わせして、先生が原稿をつくってくれて。〕その文章のなかでも、ちょっと違ったところは直して。わたし、その前の晩にひとりで練習やったら悲しくなってきたね。やっぱり、裁判所ちゅうとこ怖くもあったし。体がやっぱり震えてね。時間が短かったから考える暇を与え〔られ〕なかったから、よかったんだろうと思う。

〔次が、2004年5月の、奄美和光園での「検証会議」での証言。〕他〔の療養所〕は療養所の〔入所者の〕ひととか〔証言できる〕ひとがいっぱいいるけど、奄美〔和光園〕のばあいは、園の入所者（ひと）が少ないし、自治会長の作田隆義さんと副会長の牧菌〔忠義〕さんが、やっどこさでやれる〔ぐらいで〕。そしたらね、国宗先生が「奄美は、遺族のひとがいるから、遺族にやらせます」ちち言うからね、「赤塚さんが会長だから、〔赤塚さんが〕いいですね」ちち、わたし言ったのよ。したらね、「いや、晴海さんもやってもらいます」。「先生、わたしまで？ いいよお。2人までは〔やらなくていいんじゃない〕」って、そうやって断ったけど、「いや、やってください」って、国宗先生から命令がきて。そのとき、〔勝訴判決の〕3周年〔記念〕で、わたしたち、天草と大分、旅行してたんです。〔電話で〕「いま、どこですか？」ちち久保井先生が言うから、「いま、大分です」ちち言ったら、「かならず検証会議までには帰ってください」ちって。

そうしたらね、遺族のことに福岡先生が関心を持ってらしたちうことを久保井先生がちゃんと見抜いて、〔検証会議のあとの〕夜のパーティのときに、「福岡先生のところに行こう、〔横に〕座ろう」って、久保井先生がちゃんと按配（あれ）したもの。そういうあれがあって〔きょうの聞き取りがあるわけ〕。

追悼式典で追悼のことばを述べる

追悼式典のことは、〔最初の年は、終わってから知って〕K子さんとか中村幸子さんとか、みんながお互いに電話してね、「残念だったねえ」って。たまたま、〔弁護士の〕先生たちが奄美（ここ）にいらしたもんだから、わたしはわたしの思いとして、徳田先生、国宗先生、小林〔洋二〕先生に話をだした。「わたしは学問もアタマもないから、先生たちに言い過ぎしたりなにしたりすると思うけど、間違っと思ったらごめんなさい」ちって、徳田先生に、「先生。先生たちは、わたしたち〔ハンセンの〕子どもたちの気持ちが、ほんとにわかって

るんですか？」〔どうも〕先生たちには先生たちの事情があつたらしい。弁護士〔の先生たち〕は、〔6月22日を国が〕「謝罪」をする日としたかった〔みたい。だから〕国が「名誉回復及び追悼の日」として「追悼」ちう〔言葉を〕入れてきたのに、あんまり関心を持たなかつたらしい。〔わたしが〕強い口調で言った〔もんだから〕、「ほんとに、申し訳ない」っち。「自分たちの浅慮（あれ）で、あなたたちに悲しい思い〔をさせて〕……」。わたしが言わなければ、今年もならなかつたと思うけど、やっぱり、わたしたちの思いがちょっとあつたもんだから、わたしがわたしの責任で話したし。そうしたら、徳田先生から、「れんげ草の会の〔遺族のひと〕何名かに謝罪の手紙を書きたいから、住所、教えて。住所、教えて」って、あんまりしつこく言うもんだから、「先生、いいよ」って。「先生たちとの話し合いで、わたしたちも理由がわかつたから、〔わたしから〕みんなに伝えるからいい」って、わたし言った。それで、みんな納得しとつたのよ。でも、「かならずやらせる」ちって、先生、言っておして。〔今年〕1月のれんげ草の会があつたとき、国宗先生がね、「自分たちも、こういうこと、晴海さんから指摘されるまで、ほんとうに考えが足らなかつた」ちって謝つたし。久保井先生も立ち上がって謝つた。そして、「今年は、追悼のときに、遺族の意見表明（あれ）をちゃんとやってもらいます」ちって話が出たから、「やっぱり、会長である赤塚さんにしてもらつたらいいじゃないですか」って、わたしは声だしたんだけど、そのときに、久保井先生が「〔話が固くならないように〕男のひとじゃなくて女性の方にしてもらいたい」って〔いうことで〕わたしに回ってきたの。「わたしは、文章もまとめきれないし、そんなことできないよ」って〔辞退したけど〕、久保井先生が「お手伝いします」っち、また言うし。だから、わたし言わなければよかつたのにつち、あとで反省をしたのよ。いやあ、もうほんとに、言いだした責任（あれ）でやらせ〔られ〕てるかなとも思ったけどね。

〔「追悼のことば」のなかで「ハンセン孤児」という言葉を使った経緯ですか？〕わたしがね、〔久保井〕先生にね、「先生。あのね、〔昭和〕20年代ぐらいの、日本が貧しい時代に、戦争孤児がたしかにいたと思いますけど、わたしたちは両親がいてもね、両親と暮らせなかつたひとつの孤児ですよ。孤児といっしょですよ」って、わたし言ったのよ。「ハンセン孤児じゃない、わたしたち？」冗談のように、それは話したつもり。親がいても、親はわたしたちが病気しても来れない。運動会があつても来れない。何があつても来れない。親ちう形だけのもので、療養所に隔離されて、出て来れるわけでもないし。わたしたちは、他人（ひと）の親子関係をうらうらして見るだけで、ほんとに孤児といっしょですよ」って、わたしが言ったのよ。ちょこつとの話で、ものの道理で言ったつもりだけど、先生がちゃんと聞いてって、しっかりと、ここに重点的に入れてるところがね、いやあ、すばらしいなとわたしも感心してるの。

The Lawsuit Recalled Forgotten Memories: An Interview with the Family of a Hansen's Disease Patient

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of the family of a Hansen's disease patient. Ms. Harumi Oku was born in Fukuoka 1946. Her mother and grandmother were afflicted with Hansen's disease. In 1943 Harumi's mother was confined in the Hoshizuka-Keiaien Hansen's Disease Sanatorium in Kagoshima, but escaped with the help of her fiancé, who later became Harumi's father. In 1950 Harumi's mother was confined again, this time in Kikuchi-Keifūen in Kumamoto, together with her father who did not have Hansen's disease. Four year-old Harumi was sent to Tatsutaryō, a special nursery for the children of patients with Hansen's disease. In the spring of 1954, children in Tatsutaryō who had reached school age wanted to attend an elementary school outside of the nursery instead of going to the built-in school connected to the nursery, but the neighbors were opposed to this, prompting a controversy (Kurokami School Incident). Harumi was in the second grade at the time.

Later, Harumi went back to her parents' hometown of Amami-Ōshima, but life there was quite miserable. The discrimination against Hansen's disease patients was harsh. The younger sister of Harumi's mother was even divorced simply because there were patients in her family, and she was left to take care of two children by herself. Harumi stayed with this aunt until she grew up. She had to struggle with poverty and unfair treatment from relatives, while enduring the contemptuous words "you, daughter of a Hansen's disease patient!"

In May 2001 the plaintiffs won the lawsuit against the Leprosy Prevention Law. Accordingly, the family members of the deceased Hansen's disease patients like Harumi appealed to the court. In preparing for the case, she collected information, examined her mother's history in the sanatorium, and met with the child-minders at the nursery, her mother's friends in Hoshizuka-Keiaien, and other patients' families, an experience that caused her to recall childhood memories she had almost forgotten. This research note concerns Harumi's life story and how she was deprived of her family memories by the Segregation Policy.

The interview was conducted in July 2010 at Amami City, by Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, and Sajik Kim. Harumi was 63 years old when this interview was conducted, and follow-up interviews were conducted in October 2010 and November 2011.

Key words: the Leprosy Prevention Law, children of Hansen's disease patients, life story